食を饗する筈にて拵えたる鮮大分餘りしに付携え往て贈りしに斯る萬里の異郷にて海苦卷に鯖の姿鮮が口に上らんとは意外のことにて殊に珍らしと て大に喜ばれぬ此地には鰻非常に多く朝市に行て見れば大小無數、價も亦極めて廉なり之を賣る婦人共が「ナイフ」を手にして割く鹽梅、固より我國の割き方とは違へども中々速かなり中串少々購ひ歸り船にて「カバ」燒を試みたれども味、左迄美ならず土人は如何なる料理法にて食するか鰻の「フライ」などは餘り感服せざるべし龍動の船渠内にも鰻多く水夫等は暇あるとき之を釣りて「カバ」燒を拵らえる由なり

誰れしも故郷は懇しく郷人は懷かしく小供の時から喰ひ慣れたる米の飯に味噌汁澤庵漬の味は忘れられぬと見え我會社船の安土府に繫ぎ居るときは毎々大陸在留の我武官、留學生の中一人か二人か來りて茶飯の所望、サテは正宗の馳走を請求せられざることなしと云ふ曾て龍動に於て或る船の料理人が豆腐を作り大評判となり根岸氏が之を知友に頒たんとして第一其入れものに困却せしとの奇談も傳はれり

一日事務長龜井氏と共に「プラッセル」府に赴く横濱より東京に到る程の距離にして汽車四十分乃至一時間を要す白耳義王國の首府なれば王宮を首め諸官廳皆此に在り我公使館もありて本野公使在勤す人口凡そ五十萬、家並み能く市街一體清潔にして電車縱横に馳せ交通甚だ便利なり人の喚んで小巴里と稱するも溢辭にあらず但し此地に來ると佛、蘭兩語にあらざれば通用せず、われ等は殆んど唖同然、馬車を雇ひ食事を執るも容易のことにあらず幸に龜井氏は一二度當地に來遊せしことあるが故に略ぼ地理を知り居り漸くにして公使館迄たどり付たれども本野公使其外書記官連中何も避暑或は他出中にて不在唯外交官補の本田某と云ふ人一人館内に殘り居れり是は龜井氏の知る人なれば彼是と土地の模樣を聞き居る中、農學士林要太郎氏(人造肥料の事研究の爲め滯在し居る由)も來合せたり、予は豫てより瓦土樓の古戰場、此近邊に在りと聞居たれば本田氏に就き之を吊ふ路筋を議るに夫れは最と易きことにて馬車なれば一時間餘汽車なれば三四十分間に過ぎずとの話に付左ればいかんと決心し林氏にも同行を勸め遂に三人にて公使館を出、先づ「ミヂ

安土府、瓦土樓及び「ロッタアダム」

イ」停車場に趣きぬ

停車場にて、どの汽車か、この汽車かと見回はす中、三十前後の一婦人狎れ〳〵敷近より來り英語を以て卿等は瓦土樓の戰場に往くにあらずや夫れなればこの列車なりと、われ等一行を案内す、われ等も定て是は英語の出來るを自慢に世話燒き呉れることならんと思ひ居りしに實際左にあらずと見え、われ等の車箱に乘込み少し話しては又次の車箱に往き又還り來りて話す所、如何にも不思議なり既にして一葉の引札を出して、われ等に與ふるを見れば戰場に在る「ウエリントン、ホテル」の客引なり兎も角も渡りに舟の心地して其婦人より途中色々の話を聞き「ブレイネ、ラ、アルード」と稱する停車場(ブラッセルより十三哩)にて車を下れば案内者共集り來りて互に客を爭ふ、われ等は彼の婦人の周旋にて「ウエリントン、ホテル」の乘合馬車に打乘り外に米國人二人と共に一人の案内者を具して田甫路を驅けり行く

頃は千八百十五年六月の十八日、彼方は捲土重來の奈破翁、之に屬する佛蘭西の勇兵其數七萬餘人、此方は英、獨、蘭の聯合軍、其數六萬七千餘人、英將「ウエリントン」を總大將に推立、雙方此地に對陣、全歐洲の運命を賭したる激戰を遂げたるは實に世界の歴史に於ける大活劇なりき此日は前夜來の風雨にて天色未だ開霽せず朝の間は殘雨尚ほ下り居たれども晴れ模樣に見ゑたれば奈破翁は馬を乘り廻して其陣形を整ゑ、十時頃より漸く砲戰を始め引續き各方面に於ける激戰となり三四時の頃は最も甚だしく、而して其頃迄は佛軍の旗色善きが如くに見ゑけるが折しも普國の援兵後れ馳せに佛軍の背面に到着するあり此に於て佛軍は前後に敵を受け非常の苦戰となり晩の八時頃には全く佛軍の敗北に歸し終り奈破翁は佛國さして退軍せり是れ此戰の梗概にして當時雙方の死傷、佛軍は凡そ二萬、聯合軍は凡そ三萬、合計五萬の上に出で英軍だけにても六千九百餘人の死傷あり其内士官四百五十六人に達せりと云ふ兵家は此戰を評して奈破翁の敗は全く夜來の風雨の爲め泥濘路に滿ち砲兵と騎兵との操縱意の如くならざりしに因ると爲す奈破翁ほどの名將も傾く運は如何ともし難く之に反して、幸に此大怪物を破り得たる「ウエリントン」公こそ幸福の人と謂ふべけれ當日公が瓦土樓に本陣を構ゑし故に今に至る迄

之を瓦土樓の戰と稱すれども其實、實戰の地は「マウント、セント、ジュアン」より「ベレ、アライアンス」邊に在り(瓦土樓より此「セント、ジュアン」迄は道程凡そ三哩)故に日耳曼にては多く之を「ベレ、アライアンス」の戰と稱する由なり

停車場より望めば平野漫々として高低、靜なる波の如く其間林樹村落或は連り或は斷ゆ而して突然空に抽く三角岡上に微かに獅子像の見ゆるは「ヲレンヂ」公の負傷せられし場處に築上げられたる紀念碑なり馬車轆々として馳すること一哩餘、路に沿ふ畑は一面に糖蕪を植ゆ第一に着きたるが「ホーゴモント」寺の舊迹にして今は堂塔もなく尋常百姓の家二三あるに過ぎざれども寺の壁、井幷に建物の小部分依然として存在し僅に兵燹を免れたる聖母の像が物寂みしそうに殘るも哀れなり案内者は一々此樹彼石に就き英佛激戰の狀を示說す、此處は當日の中に於ても最も戰の激かりし所にして若し英軍が、こゝを打ち退けられしなれば遂に佛軍の全勝に歸したるならんとの評ある程なり左れば屍を曝らせし猛將勇卒其數を知らず彈雨硝煙、骨碎け肉飛び一大修羅場を演ぜしこと戰記を讀むも人をして尙ほ慄然たらしむる所なれども物換り星遷り八十五年の歲月は、いつの間にやら殺氣を掃ひ腥風を散じ寺の舊庭內には夏草生ひ茂りて徒らに兵士どもの夢の蹤を留め牧馬の悠々として遊ぶを見るのみ偶ま置かれたる三四の墓標も空しく草の裏に埋め去られんとす、寔に無殘とも謂ふべき有樣なり

復た馬車を驅ること六七町、獅子岡下を過ぎて「ゴルドン」大佐及び「ハノーヴェリヤン」戰死士官の紀念碑前を過ぎ、「ヘイ、セインテ」の農家に至り曼軍苦戰の痕を見、還り來りて獅子岡に上る高さ數百呎、其頂上に獅子碑睨の像を置く其重さ二十八噸、當時の戰利品たる佛軍の大砲を以て鑄造せり此を以て後年佛軍が安土府へ出陣の際、兵士ども此岡上に登り餘憤を逞ふし忽ち獅子の尾を打ち落し將に全像を碎き去らんとせしを將官漸くのことにて制することを得たりと云ふ、此岡上より望めば戰場は雙眸の中に在り其區域數哩に涉り大軍の運動には屈强の地なり案內者四方を指點して佛軍と聯合軍との布陣の狀形より馳突の模樣等を說くこと頗る詳なり、われ等も髣髴として耳に戰聲を聞き眼に戰狀を見るの想を生ず而して晚風落日も亦われ等の感を助くるもの

ゝ如し岡を下れば其邊に五六の人家あり「ウエリントン、ホテル」も其中の一にして「ホテル」と云へば如何に田舍にても少しは見るべきの建物かと思ひ居りしに實際は大違ひにてむさくろしき休憩所に過ぎず其中に酒場あり又奥の一室には戰場にて掘出したる古錢、人骨、馬骸、鐵砲の破片、折戟等を少し計り列べ稱して「ミユヂヤム」即ち展覽場と謂ひ居るも仰山なり其外、杖、寫眞等の紀念物を賣る、われ等も少憩、將さに出でゝ馬車に乘らんとすると彼の案内婦人、先に歸りてこゝに在り、われ等を要して手引料を呉れと云ふ、あつかましきことゝ思へども致方なく二法を與て去る今度は路を換ゑて停車場の方に向て馳す路〳〵小供等が追驅け來り觔斗打て錢を乞ふ何れも敝衣徒跣、田舍は何處も變らざるものなり五時頃、停車場に歸り來れば雨降り出せり豫定より滊車後れ「ブラッセル」に着せしは七時過ぎとなれり此日案内者が不十分なる英語を以て戰況を說き自ら其祖父が奈破翁に從ひ此地に戰ひし一人なりと誇り鞭を擧げて處々を指示する所、左なから大隊の兵士を指揮するが如き身振して意氣激昂、聲色共に動き居りしには同行の人々皆笑を催さゞるものなかりき即夜安土府に歸り來る

又一日安土府代理店の支配人「スースト」氏の案内にて和蘭の「ロッタアダム」に遊ぶ安土府より五十九哩、汽車にて凡そ三時間の旅程なり國界は安土府より十八哩程の所に在りて稅關の官吏夫れ〳〵貨物の檢査を爲し居れり途中見る所、唯一面の低地に林樹村落處々に散在し柳綠草青、牛吼ゑ馬嘶き、寺の塔高く聳ゑ幾多の風車のガタ〳〵と穩かに回轉するあるのみ

「ロッタアダム」は北海岸より十五哩「マアス」河上に在り人口三十二三萬を有し和蘭の最も繁昌なる港なり其の大陸に於ける關係、安土府は輸出港にして此の「ロッタアダム」は輸入港と概稱すること適當なるべし即ち凡そライン河を溯りて日耳曼内地に入る貨物は皆此港を經過するなり故に其港の狀勢も自ら安土府に異なりて貨物は陸上に揚げることを要せず遠洋航船より直に川船に積移すもの多し從て繫船所の數は少なく其代りに喫水淺くして細長き蜈蚣の如き川船、舳艫相連りて河上に在り尤も河の幅も安土府の河よりは倍以上も廣く中流にても大船の投錨更に差支なく而して其繫船所と謂ふも河

安土府、瓦土樓及び「ロッタアダム」

岸に沿ふて作りたるものにあらず別に堀船渠を構ゑ此中に入りて繫船することゝなり居れり一體に水利の便なる地なれば市中にも溝渠縱橫、猶ほ東京の深川邊の如く貨物の運送多く小回り船に賴るが如し其外尙ほ處々に運河、を開通し安土府に迄も之に賴りて貨物を運び得るなり昔時は「マアス」の河口水淺くして大船の出入を妨げしも近來流末疏通工事を施し復た昔年の不便を見ることなきを以て港の繁昌、此十五年程の中に大進歩を爲し今にては和蘭國の貿易高五分の三迄此港に賴る由

我會社の代理店は「バン、ヲメレン」と稱し中々盛なる回漕業者なり店主の好意にて特に小蒸滊船を仕立、港內を案內せられ如市中にては別に之といふ見物場處もなければ、その晩直に安土府に引返す

八月十二日、もはや安土府にての積荷も終りたれば博多丸は正午に解纜英吉利海峽に出づ翌朝起て見れば船は「テームス」河口に潮待ち居れり前岸の烟霞漠々として左ながら我國春晩の景色なり旣にして潮滿ち來り徐々河を溯り「ローヤル、ドック」に繫留す途すがら兩岸の風物又は出船入船の往達ふさま中々に面白し

「カアデッフ」

龍動に滯在の折柄わが阿波丸、偶ま「カアデッフ」に於て石炭の積入を爲し居れり然るに同港にては當時炭坑人夫共の同盟罷業の爲め石炭の採掘常の如くならず積取に來りし船舶、何れも豫定の石炭を得る能はず空しく碇泊するもの數十艘の多きに及び中々の有樣なりと聞及び、之を實見するも後の參考なるべしと、八月十七日午後六時「バアディングトン」停車場を發して夜の十時半「カアデッフ」に着せり不知案內の場處へ斯くの如く運着するときは何角と不便なるべければ初めは凡そ日暮頃に着くべき豫定にて根岸氏より時間を敎ゑられ三時過停車場にゆきたる所、豈圖らんや其時間は間違にて同地行の列車は午後六時迄發車せずといふ日を更ゆるも殘念なり又今更引返して旅舍に歸り再び出直すも畢竟は馬車賃を空費するのみに止まれば二時間餘り我慢して停車場の待合に休憩、且つ假眠し、且つ漫讀し漸く六時になりて乘車し

遂に深夜に到着することゝなりしなり着て見れば果して東西は分らず先づ無暗に賑かなる所に出、旅店を求めんと思ひしかど又考ふるに夫れよりも寧ろ直に阿波丸に到るに如かずと、即ち巡査に道筋を尋ねしに馬車にて驅れば二志位にて二三十分あればゆき得べしとの告げに從ひ、其通り馬車を雇ふて船渠さして驅り出せり何分夜道にて知らぬ所のことなれば近きも遠き心地し御負けに空は黑く人通りは少なし何となく心細ければ馭者に汝は愈阿波丸の所在を知れるかと詰りしに、定めて數日前入港せし大評判の日本運送船のことならめ夫れなれば繫船場所も能く承知し居れりとの答に付稍安心して往くうちに馬車は船渠構内に入れり何がサテ何れの船も皆出來得る限り積込を急ぎ居ること迚、夜も仕事を休まず船渠の側に達し居る蜘蛛の巣同樣の軌道上に往復する送炭車は引きも斷らず馬車は此軌道を横ぎりて過ぐることゆえ、暗黑にて炭車の往復定かに見えざれば一町往ては、宜きかと立番に問ひ又一町往きては同じく聲懸け以て炭車に觸接する危險を避く予は車上に在りて膽の冷ゆること幾なるを知らず漸くのことにて阿波丸の繫ぎ居る

と云ふ「ロース、ドック」の一端に着たれども目ざす本船は船渠の側に見えず馭者は此處に相違なし此船ならんと一船を指示して己れは一刻も早く歸り去らんとて頻に賃金を催促す然れども其船を見るに阿波丸にあらざれば予は賃金を與へず更に馭者をして近邊の立番に聞かしむ立番曰く阿波丸は船渠の側を離れ今は渠の中央に繫り居れりと、然らば之に達する解はなきかと聞くに最早時刻遲く容易に得難しと云ふ如何せんと思へども別に分別もあらざれば尙ほ馭者に命じて頻りに物色せしめ遂に其在所を見付たれども正さしく船渠の中央にて、解にあらざれば之に達せん樣もなし馭者は早く〳〵と賃金を促して止まず賃金を得れば彼直に予を捨て去ることを知るが故に予は中々之を與えず若し本船に達し得ぬ時は再び市中に引返し旅舍を求めざるべからず夫れには馬車なくては叶はず兎も角も汝は先づ船渠の側に立ち阿波丸を喚び試みよ自然聲の達することもあらんといふに付彼れも致方なく命に從ひ大聲を發し阿波丸々々々々と連呼す左れども其聲ナマリて阿波丸とは聞ゑ難く唯「アーマ、々々々々」と云ふ樣に聞ゆる故にや更に應ふる聲もなし

予は最早引返さんと思ひしかど折角こゝ迄來ながら空く返るも殘念と茫然四邊を見廻はすうち幸ひ前に繫ぎ居る船に人の歩行し居るあり依て之に聲掛け許諾を得て其船に上り今度は予自ら聲を擧げて阿波丸々々々と連呼す日本人の聲は自ら日本人の耳には通じ易きと見え忽ちヲーとの返答あり予は始めて蘇生の思にて先づ我姓名を告げ如何にせば船に達するを得べきやと問ふに今船より小舟を船渠側迄迎に差立べしとの答を得たれば是なれば大丈夫と船渠の側に返りて馭者に少々酒手を與れて返し相待つ所に幾ならずして小舟漕ぎ來れり乃ち手探りにて渠壁を踏み降りて之に投じ阿波丸に着きたれども舷梯は引上げ居りて下すに由なく舷側の繩梯を攀て甲板に上り「ボーイ」を喚び起して一室に入る此時の心地は地獄より極樂に來たるが如く思はずホット大息を吐出しぬ

右の次第にて船に着く迄に除程時間を費し船室に入りたる時は既に一時前なり此日は汽車中にて晩食を執る積りなりしが別に乘合もなきに付何時の間にやら睡を催し覺めて後給仕に聞けば食事の時間は、はや過ぎ去れりとのことに據なく何も食せず其儘にて船迄來りしこと故、肚裏一物なく空くグーグーの聲を發し居れり其内事務長村上氏も起き來りたれば之に頼みて乾肉二三片を得て漸く飢腸を療して眠に就けり寔に日本出立以來の一大困難なりき

翌朝起き出れば船長「トレント」氏其外皆々來りて如何なれば昨夜の如く遲く來りしかと問ふに付其顚末を話してハテは大笑となれり聞く所によれば阿波丸も昨晩迄は船渠側に横付けに繫ぎ居りたれども、他船の積荷都合にて中央に轉じたるなりと

此邊の石炭は其質最良にして世界無比と稱す輕鬆、碎け易く炭末、細塵となり車より移して船に積み入るゝ迄は自ら黑烟を卷き起す此を以て船上は申すに及ばず何れの所も皆此炭末を以て汚され觸れば直に眞黑となり白き「シャツ」は一日に四五度も取換を要する程なれば其積入に從事する人足共の顏の如き唯眼ばかり閃々として白人種も一見黑奴と疑はるゝもをかし尙ほ此炭末は管に飛散するのみならず少しく空隙あれば直に竄入し來りて止まざる

「カヤデッヲ」

を以て阿波丸に於ても食堂幷に甲板上に在る客室等の窓には目張りを爲し居れり

事務長村上氏と共に船渠を巡視す當地には「ビユート」船渠、東西二箇處と「ローズ、ドック」幷に「ロース、ベイヅン」の四船渠あり數十艘の大船を容るゝに足る前に述べたる如く當時石炭の供給常の如くならざる故、船渠内には積荷を待つ船舶、輻輳し其狀左ながら折の内に鮓を詰めたるが如くにて能くも其間を出入し得るものかなと思はるゝ程なり蓋し斯の如く船舶の輻輳するは其近因全く炭鑛夫の同盟罷業に在りと雖も同盟罷業の原因は石炭の景氣非常に宜しく平年一噸十七八志位のものが今年は俄に昇りて二十七八志に及び坑主の收入倍加せしに付其割を以て賃金の增加を得んとするに在り而して石炭の斯の如き好況を呈せしは全く南阿事件に引續き支那事件起り各國軍艦の燃料として之を需むるもの多きに因る由にて本年の如きは實に二十七年振りの好況なりと評し居りぬ從て斯業に關係する勞働者の勢力も甚だ强く一兩日中には鐵道人夫も同盟罷業する模樣あり然るときは當港一切の機關、且らく中止同樣の姿となり到底石炭を積入れて出帆すること覺束なしとて我阿波丸の如きも代理店大奮發にて其同盟罷業前に積入を終らんと急ぎ居れり、船によりては既に入港以來三十日以上になり未だ積入を終らざるものありと聞く何にもせよ非常なる狀況なり

大英國に於て產出する石炭は其額一箇年略ぼ二千二三百萬噸にして其内千二百萬噸程は此邊より輸出する由なれば其積込の方法に至りても萬事簡便なる新工夫に依れり其方法は先づ鐵道の便に賴りて近きは三四十哩、遠きは五六十哩ほど隔りたる炭坑より石炭を船渠側迄輸送し炭車よりして直に之を水壓力にて運轉する所の昇降機に附屬する大鐵桶中に移すと忽ち其機力は之を船艙上に轉運し而して桶底を外づせば内なる石炭は一瀉して艙内に落ち入る順序なり一車即ち一桶の量十噸、時を費すこと一回凡そ五分、即ち一艙一時間に百二十噸を積入れ得る計算なれば同時に二三艙に積入るゝことゝせば三四千噸の石炭は十時間を出でずして積終るべし同地の記錄に依れば正味二十八時間に九千二百餘噸を積得たることありと云ふ

「カナデツフ」

近來當港に出入する船舶、益增加するを以て在來の船渠にては不足を告げ目下新に一大船渠築造中なり此等の船渠は現今總て「カアデッフ」鐵道會社の有に屬すと雖も原とは此地の「ビユート」侯爵家の私有なりしなり故に鐵道と共に之を株式組織と改めたる後も依然其株の過半は同侯爵家の財產にて先般同侯の死する迄其社長を勤め居られたり此地は「ブリストル」海峽の盡くる所「シイヴアン」河の流末に當る一港なれども、港外水淺くして船渠への航路も其竣渫に餘程の人力を費し居る程なれば其各船渠の如きも悉く皆人造にして之に費せし資本は蓋し非常の巨額なるべし當港出入船舶の數は千八百九十八年の調に依れば左の如し

入港　船數一萬五千三百八十九艘　此噸數九百五十八萬九千八十九噸

出港　船數一萬五千四百十八艘　此噸數九百七十九萬六千六百四十一噸

市中と船渠との間には電車鐵道あり凡そ二十分時を要す市中は人口十八九萬あり市街も一體に廣くして清潔なる方なり「ビユート」侯の城は石壁奇古其建築餘程年所を閲みしたもるのにて市の爲めに一雅致を添ゆ

午後三時前「カアデッフ」を辭す今度は時間を間違へぬ樣に吟味して阿波丸の「ポーイ」に革囊を持たしめ早くより停車場に來り龍動行の列車は何れなりやと二三の驛夫に問ふに其答ふる所、各相同じからず而して線路は五六に渉り乘車場も夫れ〳〵異なり甲より乙に行くには墜道に依るを要し慣れぬものは中々面倒なり余は此墜道を二三回も往復して漸く龍動行の乘車場を探して乘ることを得たれども若し發車間際に來りしならんには屹度乘り後れたることとなるべし不知案内の所は停車場が一番心配なり

「サウザムプトン」及び「ハアブル」

龍動には社友も多ければ前後四週日程の滯在に過ぎざれども今去り行く身には何となく名殘り惜まるゝ況んや是迄は道連れもありたれども今よりは眞の單身獨歩となるに於てをや道筋は「ハアブル」に渡りて巴里に出「馬耳塞或「サウザムプトン」及び「ハアブル」

は、「プリングッシュ」より彼阿の郵船に投じて孟買に向ふ筈なれば手荷物は大抵龍動より直に其船に托することゝなし置き革甕一箇を提げて八月二十七日陰雨を冒し十二時五十分、瓦土樓の停車場を發し四時頃に「サウザムプトン」に着す龍動より七十八哩なり

「ハアブル」行の便船は夜の十二時に當港を出帆する筈にて夫れ迄大分時間もあれば「ホテル、ラッドレー」に休憩、出でゝ船渠を視る原來當港は「イッチエン」「テスト」兩河の海に向て會流する中央に位し船渠は舌端の如き處に設けられ小なるを內船渠（インナードック）、外船渠（アウタードック）と云ひ大なるを「エムプレス、ドック」と云ふ外に目下築造中に係るもの一箇處あり其附屬の倉庫よりして鐵道との連絡の都合等、設計極めて完備し現今「ユニヲン」線「カッスル」線、日耳曼線等大船巨舶の寄港場たり龍動との間、急行列車にて二時間足らずの道程なれば旅客の此港より出入するもの常に多し龍動に比すれば大船の爲めには潮待の心配なき點都合よし我會社船の如きも近來迄は復航龍動に寄港せず此地に寄りて船客を積取ることゝ爲し居れり現今人口十萬內外なれども逐々發達增加の勢あり船渠は總て「龍動及び南西鐵道會社に屬す「ハアブル」行の便船も亦同會社の附屬なり此地に在る乾船渠は其長さ七百五十呎（千呎に增すを得）實に當時世界第一なりと云ふ晩來雨益劇しく風さへ加はり來たれば市中を回覽する能はず「ホテル」に歸りて食後、浴を執り午後十一時滊船「アルマ」號に上る千二三百噸の小船なれども一時間二十哩を駛る快速なる客船なり

解纜後風雨益甚だしく船の動搖頗る大なりしも余は船暈を感ずる迄もなく仕合せにも直に睡魔の襲ふ所となれり翌朝起き出れば同室の外人頻りに夜來風波の高かりしを說き予に心地如何と問ふ予は總て夢中なりしが今にして憶へば隣室に嘔吐の聲を聞きしが如しと答へ甲板に上りて見れば洗ふたる浪の迹、猶ほ未だ乾きも去らず而して前岸の遠樹、既に是れ「ハアブル」の港なり予は心中私かに此分なれば船にも大分慣れたりと見ゆ前途も先づ安心の方なりと喜びぬ

朝八時上陸「フラスカッチ」と云ふ旅舍に投ず、こゝは早や佛蘭西の國なれば英語の分かる給仕人少なく、そろ〳〵と困り始めたり朝食後當地滯在菅少佐の

寓を訪ひ暫時用談、午後代理店「ラングスタッフ」氏の事務所に往き同氏と會談中偶ま大阪の市會議長森作太郎氏、磯野某、小林某の兩氏と共に我龍動支店長の添書を持て代理店に來る此人等は大阪築港に關係あるを以て其參考の爲め當地の船渠を見んとするなり予も亦同じく船渠を見る望なれば幸のことなり迚、馬車二臺を雇ひ「ラングスタッフ」氏の案内にて一行四人、船渠内を周覽せり此地は「セイン」河の口に在りて人口凡そ二十萬、船渠の數大小十箇所、内港より水路に依りて互に相通ず附屬倉庫等何れも新規にして其設備頗る立派なれども割合に船舶の出入多からず船渠内、寧ろ寥々たる方なり從て倉庫内にも更に貨物の堆積するを見ず蓋し其地理上の然らしむる所に因るならん歟我會社の船は「クルーゾー」の製造に係る軍器積取の爲め折〳〵此港に來ることあり、われ等の巡覽中、船渠の内外に哨兵線を張り兵士の警戒するを見る何事ぞと聞くに此程來職工人夫共の同盟罷業あり其連中が己等と意思を異にして依然就職する所の同類を攻擊するが故に殊に兵士を派遣して之を防ぐなりと云ふ同盟罷業の歐米諸國に於ける其勢毎、中々猖獗にして往々兵を用ゐて之を制し殺傷を生ずることも少なからずと聞きしが實に其虛ならざるを目擊せり

「ラングスタッフ」氏に別れ森氏等と市中を散歩す最早晩に近ければ予の旅館にて食事を執り同じく巴里に往く筈にせり其中森氏は何か買物あればとて三四十分の後に右の旅館に來る約束して獨り別れ行き予と小林磯野兩氏とは尙ほ彼是と覽回り暫くして旅館に歸り來り給仕に向ひ一人の日本紳士來りて待ち居らずやと聞くに英語が分りたるか分らざるか覺束なけれども兎も角も知らずと答ふ、サテは未だ森氏の來らざるなりと三人予が室に集り話しつゝ二十分立ちても三十分立ちても森氏未だ見えず予は再び階を下りて玄關に來り幸ひ英語の能く分かる給仕に出會ふたれば之に向ひ一日本人の疾くより來るべき筈なり未だ見えざるやと念推して尋ねたれども未だ見えずと答ふ餘り不思議さに小林磯野兩氏に森氏は迷ふたるにあらずやと言ふに兩氏の答ふるには森氏は至て早飲込みの人なれば屹度此「ホテル」の名を忘れ致方なく停車場の前あたりにて待ち居るに相違なし是迄も斯の如きこと

度々あり心配するには及ばず夫れより、われ等は晩食に掛るべしと即ち三人相携て食堂に入り既に食事を終らんとする頃、森氏奮然として入來り君等は餘りなりと顔上に青筋をふくらかし居れり此方は君が遲き故定めて停車場にて待ち居るならんと思ひ食事を終りたれば出掛んとする所なりと答ふれば森氏の言ふには予は君等と別れて後、間もなく此家に來り待つこと正さに二時間餘、更に消息なければ今獨りにて晩食を喫し去らんとする所なりと此に於て予は先刻來度々給仕に聞けども未だ見えずと言へり全體君は何處に居玉ひしやと尋ぬるに、森氏曰く予は讀書室に休憩、致方なく御蔭にて某雜誌中の支那近勢論を讀過し終れりと此に於て其間違なること分明となり森氏も急で食事を終り相携て食堂を出で玄關に來たれば最前の給仕居れり予は即ち之に向ひ先刻來予が尋ねしは此紳士にして疾くより來り居られしなり然るに汝は何故、未だ見えずと答へしやと詰れば、一向氣付ざりしと大に謝罪せり今更責むるも何の役にも立たぬことなれば一笑して皆々停車場指して出發す

巴里

巴里は世界第一豪華の地、殊に千九百年の大博覽會は夙に世人の待ち設けたる所なれば之を見がてら日々四方より集り來る老弱男女實に其幾萬なるを知らず市中の旅館は隅々に至る迄も非常の雜沓にして俄に往きて宿りを求めんとするも容易のことにあらざる由、豫て聞及びたれば予も亦龍動出立前社友の知り合ひなる一旅館に凡そ到着の日取を申遣り一室を約し置けり其家は凱旋門の近邊なる「ガリリイ」街に在り所謂る素人旅宿にして別に宏壯なる家屋と完全なる設備を有するにあらず何もかも家内ごろにして十五六人位の止宿に差支なき程に過ぎざれども閑靜且つ清潔、萬事に不自由なし而して博覽會には甚だ近く見物には最も便利なり

二十八日の晩「ハアブル」を發せしは巴里行の終列車にて、巴里に着せしは夜の十一時三十五分なり夫より森氏一行に別れ獨り馬車を賃して右の旅宿を尋ね、來て見れば既に皆寢に就き寂然たり戸を叩きて喚び起せば稍ありて禿頭

の一僕、睡眼を摩しながら出で來りて誰何するものゝ如し予は素より佛語は一切分らず唯英語を以て豫て申込み置たる如く今到着せり約束の室に案内せよと云へども此禿頭、一切英語を解せず雙方聾啞の寄合なれども此家は日本人の屢々來宿する所なるを以て彼は兎も角も宿りを求むる者なりと合點せしにや予を導て三階の一小室に案内せり予の約せしは今少し廣く且清潔なる室の筈なれば再三繰返して約束の室は如何と云へども分らねば通じん樣もなし其中、下女も起き出で來り彼等二人にて何か相談したれども尙ほ其要領を得ず致方なく予は其室に一夜を過ごし翌朝になりたれば、此家の世話燒と見る黑き顏したる五十恰好なる不愛嬌の一老婦來りて英語を以て談話を始む此老婦は餘程厚かましき女にて先づ第一に人の家に遲く來りて驚かすは甚だ不都合なり奴婢等にも氣の毒にあらずやと喋々と小言を陳ぶ之に對して予は「ハアブル」にて用事の爲め遲くなりたる旨を答へ直に室の談判を始むるに夫れは豫ての申込に從ひ二階にて宜しき所を取り置けりと乃ち其室に移り玆に漸く落付けり此家には英語を解するもの唯此老婦一人にて其外の奴婢は一語をも解し得ず頗る困却せり

朝餐後偶ま先きに「コブチック」號にて同船せし遞信省技師大岩弘平氏三四日前より此家に泊まり居れりとて來談、是は良き友を得たりと思ひ居りしに同氏は今日直に同宿の五十嵐技師と共に「リヨン」の方へ往く筈なりとて別れたり予は獨り旅宿を立出で先づ凱旋門上に登りて市中の光景を望む百萬の人家眼中に在り參差たる樓閣、烟霞の裏に隱現、幾百條の街路は綠樹と相幷行して縞の織物の如し而して近きに列ぶ博覽會の會場には五色の旌一旗、空に飜り人馬の來往、蟻の行列に似たり吾よりも猶ほ遙かの高きに聳ゑて雲に入るは有名なる「エッフエル」の塔なり其氣象の雄大なる流石に音に名高き巴里の都と思はれにけり門を下りて博覽會場に向ひ「ツロカデロ」の入口よりして之に入る切符は門外にて多くの婦人小供等頻りに鬻き居れり

博覽會の會場は「セイン」河を中に狹みて其兩岸に在り長さ一哩と三分の一、而積總計五百四十九「エーカア」(凡そ六十七萬坪)に涉り場内の建物、總計四百八十六萬五千三百二十八平立呎に及ぶ各國の美術工藝は言ふ迄もなく農事、海運、

兵器、礦業、其外一切萬事、あるとあらゆる物品を陳列して遺す所なき大計劃に成りたることなれば一通り之を覽るにも先づ二週日位の時日は必要なり若し委しく覽んとせば蓋し一二箇月も懸るべし然るに余は歸途の急ぐ身なれば迚も此の如き餘日なく漸く四日を費し走るが如く場内を驅け回りて辛ふして一巡することを得たるのみ隅々を見殘したるは固よりのことにして各國の建築、演藝の如きも見得たるものは僅に十の一に過ぎず餘は唯門口を素通りにしたる計りなり

日本の出品は概して評判よき由にて中にも刺繍の如きは大に賞讃を博したりと聞く建物は法隆寺金堂の模形にて幽邃なる樹木の中に在り其庭前の所に於て日本茶を賣る、日本より往きたる給仕女もあれども多く佛蘭西の少婦に「フラチル」の日本服を着せ之に紫の袴を穿たせたるを給仕となす土瓶に茶を入れ煎餅二三枚を添へて持ち來るお花さんとかお松さんとか喚びたくなる程にて中々愛嬌あり代價は半フラン」なり、こゝに往けは誰れか日本人の居らざることなく全く日本人の休憩場同樣なり、尤も外國人にして物數寄なる連中の來りて茶を試むるものも日々少なからず此場處に就ては殖民地部内に在りとて大分議論もありたる由なれども此位なれば先づ上等の方と思はれたり

烏森より出品したる日本の藝妓連中は其實、佛蘭西郵船會社に於て其航路の概況を觀めず爲め作りたる「パノラマ」中の點景人物に雇はれたるものにして其所には各地の風景を畫圖或は模形して顯はせり其土地々々の男女數人を置きて以て平常生活の一般を見せしむる工夫となせり即ち日本の一區は支那區の次に在り遠見には五重の塔、櫻の花盛り等を描き其前に十疊敷、椽附の一屋をしつらゑ之に疊を敷き上に彼の藝者ども或は三味を弄し或は花牌を戰はして遊び居れり外に扇芳亭の女將にや一老婦が椽に座わりて火鉢に鐵瓶を懸け茶道具を列べ置きたるも餘程妙なり併し兎も角も花のお江戸の唄女だけありて衣服の矩合等彼の龍勳の「アールス、コート」に於ける日本美人の標本程には見苦しからず、ドヲヤラ日本人らしき樣子はあれども其前を過るときは何となく心咎めして正視するを得ざりき蓋し博覽會を見に往きたる

人は誰しも同感を懷かれしならん美術館中の日本の繪畫は今迄著色活動せる雄壯なる大圖のみを覽來りたる眼には全然兒戯の如く土佐も狩野も南宗も北宗も殆んど蟲眼鏡が欲しき程にて更に引立たず夫れよりも猶ほ甚だしきは日本人の油繪にして就中裸體畫の如き宛も土左衛門を寫生したるかと疑はれ、前の烏森連中より更に一層心苦しく感ぜられたり抑も是れ余の繪事に就ては一切素人なる故、其妙味を解する能はざるに因る歟

場内には各種の見せものあり、賣店あり、飲食店あり、阿非利加婦人の尻振り踊の如き、いつも見物人にて充滿せり色淺黑き妙齡の佳人が三々相携ゑて一種の音樂に連れ腰部以下のみを前後左右に振り廻はして踊るさま可笑きこと限りなし之に反して最も五月蠅は「アラブ」の賣子にて人の手を引き袖を捕ゑ何か買はざれは止まざらしむ飲食店は上等下等種々にて「コヒー」菓子位の小店より一時に數百人を容るゝに足る大食堂を備ふるものに至る迄到る處に散在、各國の料理勝手次第に賞翫するを得べし夫れにも拘らず田舍出の翁媼が樹陰に辨當を開き一杯の茶又は「コヒー」を購ひ來りて飢渴を療し僅かの失費を惜み居るも尠なからず歐洲の文明國にも貧乏人はあるなり

日々入場するもの三四十萬人に上ることなれば其中には各國各種の人類あり立ち止まりて場内を往復する人の顏色容貌を眺むるも一興なり日本人と巡羅人とは其容貌酷似するが故に往々にして取違ゑ後より巡羅人の肩を打ち君は何處に逗留するかなどゝ話し懸けて失敗したる人もありと聞く

會場内を往復するにも廣き所のことなれば容易にあらず貴婦人の中には手車を雇ひて後より推さしめ彼所此所と巡覽し居るもあれども多くは一時間覽ては出て休み又覽に這入ると云ふ鹽梅にて中々三時間も五時間も立通しの覽通しは出來難し場内に於ては一端より一端に往く爲め「セイン」河には小舟の來往するあり外に自動の高架道路もあり凡そ疾行するの程度にて回轉し居り之に上れば足を動かすに及ばずして望む所に往くを得べく珍らしき裝置なれば慰み半分に乘り居る男女常に多し其外二階へ上るにも自動梯子あり銅貨一片を投じて之に昇れば直に階上に到るを得べく甚だ便利なり又石炭坑の模形の坑中に下るに勾配急なる太とき欄干の手摺の如きものあり

長さ十七八間に及ぶ人之に跨れば自然と坑中に下り行く所、恰も小兒の遊戯に似て面白かりき

毎週の中、二三夕は會場内に點燈して煌々晝の如し、かの九百八十四呎の高さを有する「エッフェル」塔上の燈光の如き左ながら天上の星斗を望むに異ならず此塔は現今世界に比類なき高塔にて悉く鐵材を以て之を組立塔といはんよりは寧ろ櫓の如し下より上に昇り居る人を望めば蜘蛛の巣に懸りたる蠅の蠢動するに似たり亦是世界の一奇觀にして正さに會場の中央に聳ゆ實に千八百九十九年「エフエル」氏の建る所なり

前記の通り余は走るが如く素通り同然に看過したることなれども博覽會の狀況に就て記せんとすれば記すべき事是計りに止らず然れども博覽會の事は既に去年の新聞通信等に概要掲載せられ誰も彼も知る所多ければ今更予が拙筆にも及ばざるべけむと思ひ之を省きぬ

世界の旅客に便利を與ふるを以て目的となす「クック、エンド、サン」會社は博覽會の見物に來る人に手輕く巴里の名所を遊覽することを得せしめんと日々乘合馬車を仕立、一人前一日十法宛にて何曜日には何處々々と、凡その道筋と見物する場處を定め切符を賣り出し居れり之に頼るときは三日にして巴里及び近郊の名所古迹は殘りなく見るを得べし余は豫定の滯在日數少なき故僅に一日此切符を購ひて有名なるヴエルサイユ「故宮殿の見物に赴けり

此日午前十時「グランド、ヲペラ」の前なる「クック、エンド、サン」の事務所に往けば二三臺の四頭立の馬車は既に約束の客を待ち居れり一臺に十五六人を載せ得べく而して車を英語組と曼語組とに分ち夫れ〳〵案内者を附す予の乘りたるは無論英語組にて乘合の人々、何れも英語の分る連中なれば途〳〵も話連れありて愉快なりサテ車聲轔々相列んで凱旋門を出で「ブーログ子」公園の綠樹陰涼しき間を驅りゆけば凡そ九哩餘にして「サン、クロー」に達す「セイン」の水を渡り車を下りて徒歩すること數町宮殿の故址を見る原と壯麗を極めたる建築にして佛國の史上に大關係あり奈破翁一世の如き最も此を愛し常に好んで來り居れりと云ふ宮殿なりしも憐むべし千八百七十年十月普佛戰爭の兵燹に罹り一炬灰燼と化し去り今は唯、苑花の昔に變らぬ色を呈すると大

理石の肖像の缺け殘りたるが三々五々、寂びしげに立つあるのみ錦を衣たる義士は何れに在る花の如き宮女は如何に、春殿夢空くして鵾鳩の深樹に鳴くも古を懷ふ種ぞかし

復た車に上りて馳すること四哩計りにして車は園林綠深き裏に入る、こゝに存在する一區の建物は即ち是れ「グランド、ツリヤノン」の別墅にして千六百八十七年路易第十四世が「メインテノン」夫人の爲めに建てしものなり餘り大なる建築にあらず寧ろ所謂る小奇麗なる方にて長日を讀書に消する爲めには閑靜にして極めて佳なり奈破翁第一世も常に來遊せし由にて今に其使用せし臥床昔の儘に殘り居れり其驚天動地の雄圖も幾分かこゝに成りしものもあらん懷へば亦是感慨の種なりけり此別墅の構內に一倉あり奈破翁、路易等佛國帝王の公式に使用せしと云ふ車輛を藏む實に何れを見ても金色燦爛幾十萬金を價するものゝみなり今にても各國帝王の佛國に來遊せらるゝ砌等には之を用ゆることある由

又一哩程にして白耳塞に着く人口五六萬を有する一市なり午餐を執りて後、宮殿を覽る此宮殿は千六百二十四五年の頃、路易八世初めて其一部分を構造し越て千六百六十五年より八十七八年の頃迄に路易十四世、其政府幷に皇居に充てんが爲め大に增築し其裝飾向に奇巧豪華を極め無慮五億法(我凡そ二千萬圓)以上を費したりと傳ふる程なれば其建築の雄偉にして壯麗なること洵に眼を驚さん計りなり大體の設計は中央に本殿あり南北に兩翼を張り形凹字の如くにして正面の長さ六百三十「ヤード」(我凡そ二千尺)に達し幷列する窓牖の數凡そ三百七十餘、一萬人を住せしむに足る室ありと云ふ

此宮殿は佛國の皇室幷に政體と最も密なる關係あり實に路易十四世以來、幾多の榮枯を閱みし革命の時には殆んど將さに賣却せられんとせしことあり流石の奈破翁一世も其修繕費の大なるに驚き之に手を下さず「ブルボン」家復世の後も唯頽敗を防ぐに止まり大修理を加へず「ルイ、フヒリップ」に至りて漸く之を修復して其一部分を以て歷史上の畫室に充たり其後普佛戰爭の際、即ち千八百七十年九月より七十一年三月に至る迄は普王の本陣となり建築の大部分は軍事病院に適用せられぬ普王の日耳曼皇帝と宣言せられしも「ビス

マーク」ト「フアブル」が平和條約を議せしも皆此宮殿に於ける間の出來事なり普軍去て後、七十九年に至る迄、佛國政府は尙ほ此に留れり今にても大統領の選擧だけは此宮殿に於て擧行する由なり

楚人の炬火にも燒き盡されず今に至る迄依然として當年の壯觀を存したる此宮殿こそ洵に幸運とも申すべき所なれども去るにても看來る金碧悉く是れ生民の膏血より成りしかと思へば佛國革命の慘劇を後日に演し萬乘の尊を以てして猶ほ斷頭臺上の露たるを免れざりしもの無理ならぬ次第と感ぜられぬ若し夫れ之を以て彼の「テームス」河上に聳ゆる「ウキンドゾル」宮城の古樸なるに比すれば一は堯舜の化を觀めし他は桀紂の暴を遺こすものなりと評するも過當にはあらざるべし、案內者に尾して階上、階下殿內の各室を縱覽するに路易十四世の便殿、寢室、謁見室「マリー、アントヲネー」の居室等、猶ほ當時の裝飾幷に什具等を其儘に存し壯麗なること目を驚かす計りなり殊には其長方形の廊下とも云ふべき室の兩壁に貼したる奈破翁一世の卽位式、其有名なる各戰の繪畫を首め歷史上の出來事を畫きたる數多の壁畫、又は天井裏に貼りたる繪畫の如き何れも勁拔雄健なる筆迹、坐ろに叱々の聲の畫中より漏れ來る想あり蓋し仔細に觀んとせば二三日の時を要して尙ほ足らざるべしと雖も、われ等は案內者の付き居ること迚、短き時間の割には多く覽ることを得たる方なり歸りには道を變ゑて午後六時前、「クック、エンド、サンス」事務所の前に着せり

生稻と稱する日本料理「ピクトル、ユーゴー」街に於て二階の二三室を借りて開業し居れり全く博覽會見物に來る邦人を當込みに思付しことなるべし但し日本料理といふも先づ天ぷら、刺身、漬物に茶飯位に過ぎず一膳飯屋の少し氣の利たるが如きものなれども此家にゆけば何時にても誰か邦人の居ぬことなく自ら日本人倶樂部の如き形をなし來客の宿所を記るしたる帳面もあり頗る便利なれば誰れも一度は往て試るとのことなり其價格は相當に高き西洋料理を喰ふと別に變る所なく正宗一瓶二法といふが如き例なれども中には高くても之に限ると陶然として醉ひ放談壯語、無遠慮に快を喚ぶ連中もあり此の料理店の特色、寧ろ此邊に在りて存するが如し予も一夕誰か知る人も

がなとブラリと出掛けしに果して所期に違はず偶ま「エッセン」駐在の陸軍監督官八田、原口兩少佐に邂逅せり八田氏は新識なれども原口氏は鄕人にして昨春、予に先つこと一箇月程前に渡航し來りし人なれば互に打解たる話も多く殊に樂しき心地せり兩氏は佛國各地巡遊の序に巴里に來りしとのことにて外に日耳曼人の語學教師一人を伴ひ居りぬ幸に兩氏の寓と予の旅宿とは極めて近かりしを以て爾後度々往復して話し合ひ又此生稻には兩度程會合せり獨り氣の毒なるは語學先生にして無骨なる武辨に連れられて每々日本料理を宛行れ先生中々日本食が好物なりなどゝ冷かされ居たり後「クルゾー」在の長野大尉も亦來り予が爲めに此等の人々より業務上に關する要談を聞くことを得て大に便利となれり

一夕「サンゼリイ」街の興業場に於て臘肭の藝を覽たり是は數ある諸藝の中の一なれども特に新奇に思はれぬ先づ奏樂の聲に連れて大小二頭の臘肭を舞臺に上ぼせ臺上に置き一人の附添人出でゝ之を指揮し續々として人の投げる帽子を其頭にて受て又之を次へ投げしむる藝を首めとして足の水掻きに樂器を結び付、之を奏せしむる藝等數番を演じ去れり彼の蠢爾たる海獸も敎ゆれば覺ゆるものと見へ餘り大なる誤もなく遣てのける所、中々に愛嬌あり尤も誘ふには斷えず小魚を投與すること必要にして籠中に盛り來りて傍に置けり少し附添人が油斷せば太夫先生ノコ〳〵と臺を下りて徇匂しゆき籠中の魚を偸み食ふも亦一興なり犬の藝などに比すれば拙にして樸なるだけ却て奇なり

九月三日は最早晩方巴里出立の筈なれば朝來「ルーブル」の博物館「ルクセンボルグ」公園、奈破翁廟「ノータ、ダム」寺院等、名ある場所を巡覽す然れども是等は既に人口に鱠炙する名所なれば事々しく予が記述を要せざるなり午後八時四十分「リヨン」停車場より急行列車に乘じ馬耳塞に向け出發

巴里現今人口二百五十萬、中央を貫流する「セイン」の水は長さ七哩に及び三十一橋ありと云ふ

馬耳塞より孟買に到る船中

馬耳塞は地中海に於ける佛國の要港にして人口四十五萬を有し巴里、里昂に亞ぐ繁昌の地なり其市街は近年大に改良を加へ幅廣くして頗る整然たりと雖も巴里より來りたる眼を以て見れば左ながら花の御殿より尋常町人の家に移りたるが如く、見るもの、聞くもの、往く人、來る人、皆何となく田舍じみて高尚雅潔の風に乏しき心地するは是非なし

予は巴里より十二時間にして四日の午前九時馬耳塞に着し「ルーブル、ラ、ベイ」といふ旅舍に投ず折柄、常陸丸入港荷揚中に付往て之を「ラザレー」繫船所に訪ひ事務長友高善嗣氏と共に船渠、倉庫等を巡覽す馬耳塞の港は宛も灣に底を入れたるが如くに弧狀の防波堤を築き其內部を數區に分ち以て繫船所に充つ此堤の長さ二哩に餘り其上は人の散步に差支なく內側には荷車の通行し得べき路あり船より揚たる荷物も暫時は、こゝに積み置くことを得べし、此港は千八百五十年頃に數千萬の費を拋ちて築造したるものにて其以前は今の舊港と稱する一繫船所のみなりしと云ふ千九百年の統計に依れば此港の出入船舶の數一萬七千七十四艘、此噸數千二百二十九萬六千二百五十四噸、出入貨物六百三十五萬五千八百十六噸、內輸入三百八十一萬四千七百五十一噸、輸出二百五十四萬千六十五噸、出入船客三十四萬六千人なり又以て其盛況を知るに足る

高く丘上に聳ゆたる「ガルデ」の古刹及び輪奐の美に誇る「ロングカンプ」宮殿等、割合に見るべき所多し「プラド」の公園は三哩程の南に在り電氣鐵道に賴りて海岸に出で此公園內の老樹森々たる間を散步し更に路を變へて歸り來るも亦妙なり

六日の午前十一時は彼阿會社の郵船「ペニンシユラ」號に上り孟買に向ふ予は豫て以太利を廻り「プリンヂッシ」より海を渡りて「ポート、セッド」に出で此船に便乘する考なりしも其後段々取調べ見るに何分時日切迫、以太利に往ても羅馬の滯在、僅かに一日の餘裕よりなき算用なるを以て遺憾ながら以太利の方は見合せ此地より直に乘船することゝしたるなり既に龍動に於て切符も購入し船室も相談し置きたるを以て船中萬事不都合なく、加之船に來れば忽ち英語の世界なれば大に心强き思を爲せり船側には船中の客を慰めて少し許

りの金を貰はんと熊使ひ、歌謠ひ等乞食同然の輩集り來り喧ましく騷ぎ居りぬ又甲板上にて用ゆる椅子、或は望遠鏡等を鬻くものもあり予亦一椅子を購ひ英一磅の金貨を與ゑ吊錢を徵するに、彼れ二志の銀貨を出し二志半の銀貨なりと予を瞞着せんとす、予はコイッ胡亂と心付たれば、試にそこに立ち居る一人に是れは二志貨ならずやと尋ぬるに此男も亦奸商の詐術を妨ぐるを好まざるにや笑て答へず椅子賣る男こそ能く知れりと態と取合はざるも心憎けれ、予は即ち椅子商に向ひ汝斯の如くにして瞞着せんとするなれば予は唯椅子を買はざるのみなりと言ふにぞ彼れも閉口して遂に正當に吊錢を出たり馬耳塞港の人氣、之にて窺ひ知るを得べし

同船の客は百餘人あれども日本人は予一人なり併し別に左程寂びしとも思はず又無聊をも感せず幸に風浪平穩なりしかば外人の問はるゝまゝに本國のことども話し聞せたり椅子に仰臥して讀書したり甲板を散歩したり、いつのまに時のたつかを覺えず八日の昼頃には船早や以太利半島と「シ、リー」島との間を界する「マシナ」峽を過ぐ眞に一葦の水にして兩岸の人家村落指呼の裏に在り而して名にし負ふ「エトナ」の火山は前に當りて炎烟天を焦さんとす六月落機山を越て以來、到る處多く皆平野にして邱陵高原の外、山らしき山に接せず馬耳塞に來りて少し高き峯を見たれども是迚も山と言ふべき程の山にあらず昨日來漸く「コルシカ」「サルヂニャ」等の島山を望み今復た此雄峰に對して意氣頗る快し、去るにても是れが歐洲の最後の山かと思へば名殘惜しき心地なきにあらず是夜音樂會の催あり折柄、月色清明、涼風脉々として右舷を吹き「ピヤノ」の聲も一段と澄渡るが如し實にや航海すればこそ斯の如き清境にも出會ふなれ斯味は到底陸上にて期し得られざる所なり九日、十日も液穩に風涼く夜は又月おもしろく十一日の朝には「ナイル」の流、海に入りて蒸波を濺らす所に迄航し來り間もなく船は蘇士運河の開鑿者たる偉人「レセップ」氏の銅像の下を過ぎて徐ろに「ポート、セッド」の港に着きたり、此船は「プリンヂッシ」より旅客と郵便物とを積み來る同じ彼阿會社の「ヲシリス」號と、こゝにて接續する豫定なる所、同船は明朝にあらざれば到着せざるを以て夫迄碇泊することゝなりぬ

「ポート、セッド」は全く蘇士運河の爲めに新に開けたる地にして人口未だ二萬五千餘に過ぎず、熱砂燒くが如き上に立つことなれば別段之と云ふ見るべき所もなく唯土人等が船舶に燃料炭を積入るゝことの敏速なるが人目を惹く位なり單に人足のみにて石炭を積入るゝには世界中、此地ほど速かなる所なく之に亞くが日本の長崎なりとは船員間の公評なり其方法は石炭解を本船に横付となし其石炭を笊に入れて炭艙に運び入るゝ迄なれども一時間に三百噸位は造作なく積得る由なり笊は長崎にて用ゆるものよりは數倍大きくし從て長崎の如く一つの笊を次から次へ順廻はしに廻はし送るにはあらず初めより一人にて一笊を運び往くなり

一體此地は惡漢凶徒の出沒、窮りなかりし所にして昔日は隨分生命財産に危害を受けしものも少なからず近來大分警察の制度行屆き危險少なくなれりと雖も尙ほ人氣甚だ惡く桶を倒にしたるが如き赤帽を冠り、袴の裾をくゝりたる如き股引を穿ちたる「アラブ」の詐猾なるは實に言語同斷なり

本船より陸迄僅か一二町に過ぎず無數の小艇、皆解賃、陸上迄一人三片との旗を掲ぐ、然るに予、代理店「ワーム」商會を訪問せんと一艇に乘り往き賃錢を拂はんとすれば船頭一志を請求して止まず惡き男と思ひければ一策を案じ、代理店の事務所へ案内せよ、そこにて賃錢は遣すべしと申聞け之を連れて代理店に來り若き白人の手代に逢ひ此船頭は三片の渡賃に一志を請求す、法外ならずやと話せば手代は忽ち船頭を喝し六片にて可なりと云ふ彼れ頻りに不平を鳴し居たれども土地の人には抵抗すべき樣もなく不承々々に六片を受取りて去れり予は心中私に其の策の中れるを喜びぬ、夫より予は代理店の支配人に面會、一僕を借りて案内せしめ市中を散歩す極めて殺風景なれども流石は歐洲に近き場所のことゝて鐵道馬車の設あるだけは感心なり市中より少し離れて「アラブ」の町あり隘陋なること支那人の街にも劣れり偶ま奇妙なる聲にて謠ふものあり其聲莚にて包みたる小屋の内より漏る何事にやと案内者に聞けば婚禮なりと云ふ概して「アラビヤ」の婦人は人に面を見せることを忌み外出には黑布を以て顏を裹み鼻柱上に迄、何か黑きものを當て唯眼ばかり出し居る程なれば婚禮の如きも斯の如く人目を避くる爲め其小屋を包

み廻すものと思はれたり何にもせよ奇風と謂ふべし途上に赤き果の如き菓實を鬻ぐものあり又我國にある石榴を賣るものも見受たり近村に生ずるとのことなり、三四十分間にて一通り市中を見盡し埠頭に還り來りて又小艇を雇て本船に還る賃錢六片の定なれども途中にて船頭、不十分なる英語にて昨日日本軍艦が通りたり杯と話し懸け又十三歳計りなる小供の己れを助けて漕ぎゆくを指して此子は能く働き父の爲めには、この上もなきものなりと自慢するのかと思へば忽ち何か遣りて玉はれと要請す其五月蠅きこと限りなければ一志を投して吊錢には及ばず、殘りは子供にやれと言へど尙ほ何かクドクドと話しながら又今少し賜はれと付け上り來る其中本船に着きたれば一喝して舷梯に上る右の如き有樣にて賊にいやな所なり屢々此地を過ぎしことある人の話に買物するにも餘程心得されば倉の内に閉ち込められ無理往生に高き物を押付らるゝことありと云ふ

船の甲板上には例の「アラブ」共來りて見世を出し寫眞、玩具等を鬻ぐ卵と雀を携ゑ來りて手品を使ひ錢を乞ふものもあり夜中は陸上の芝居小屋にて旅役者どもが殊に「ペニンシユラ」號の船客の爲めに興行するとの廣告來り同船の人々大分見に往けり

十二日の拂曉には果して「ヲシリス」號到着し直に旅客と郵便物とを積移し我船は午前六時に解纜す此旅客は即ち龍動より佛國を經て以太利に入り「ブリンヂッシ」より乘船し來るものなり我社の若狹丸今朝三時に蘇士より到着し事務長小野房太氏、直に我船に來訪し呉れたれども、睡眠中にて予が室の番號分らず空しく去り直に歐洲に向ひ出帆せり其旨同氏の置手紙にて承知す抑も蘇士の運河は世界に於ける空前の大事業にして其開鑿の爲め如何に世界の運命に大影響を及ぼせしかは復た予の贅言を要せざる所なり初め佛人「ヘエルヂナンド、ド、レセップ」氏が其計劃を立てしは千八百五十二年に在り當時墺、魯と土耳其、埃及の諸政府は之を可認せしも獨り英相「パルマアストン」侯反對を唱ゑ種々障碍を試みしも「レセップ」氏は之を排して五十九年より工事を始め六十五年八月十五日に初めて地中海より紅海へ舟檝を通ずるに至れり然れども夫より尙ほ工事の完成に二三箇年を費し六十九年に至りて郵便

船の通航に適するものとなり同年十一月公開式を擧行せり越て千八百八十七年巴里の會議に於て之を局外中立の場所と定め英佛兩國間に條約の訂結を見るに至れり運河の全長は八十七哩にして深さは二十六呎、運河會社の原資は一千六百八十六萬七千磅にして內八百萬磅を株金(四十萬株)とし殘を社債とす、其配當七十四年頃には僅に年五朱位なりしが追々增加し近年は一割七分に達せりと云ふ

初めの間は運河夜間の通航を許さゞりしを以て其通過に三十六時間以上を要せしも今は電氣燈の設けある船舶は何時にても通航し得べきことゝなり十六時間に減じたり英國統計家の調に依れば英國の貿易高の七分の一は此運河に賴る由なり即ち千八百九十九年一箇年間に此運河を通過せし船數(軍艦商船共)三千六百七艘、此總噸數九百八十九萬五千六百三十噸の內、英國船の數二千三百十艘に及べり日耳曼の如き猶ほ未だ三百八十七艘、佛蘭西の如き二百二十六艘に過ぎず其割合より言へば我日本船が六十五艘に達せしは先づ上出來の方なり序に同年間に此運河を通過せし船客の數を擧ぐれば總數二十二萬千三百三十三人にして其內六百五十五人の日本人あるも、しほらしからずや運河の通過料は船舶の登簿噸數一噸に付九法、船客一人に付五法なれば我郵船會社の如き其歐洲航船の爲めに一箇年間に合計七十五六萬圓を支拂ひ彼阿會社の如き一箇年間に支拂ふ所我二百五六十萬圓に達せり豈亦巨額ならずや然れども昔し此運河未だ開けず東洋行の船舶、悉く喜望峰を回航したる時に比すれば其航程凡そ三分の一を減じたれば其邊より思へば此通過料も左迄の重稅と謂ふべきにあらず

此運河の未だ開通せられざりし以前に在りては英國より印度其他東洋に到る郵便物、旅客並に貨物は一たび地中海の歷山港に於て之を陸揚し同港より「ナイル」河に到る迄は「マアマウグエ」運河に賴りて運送し夫より「ナイル」河を溯船にて「カイロ」府迄溯り「カイロ」府より蘇士迄百哩に近き砂漠の間を駱駝の背に托し來り蘇士にて復び印度、東洋行の溯船に積入るゝを常とす之を「陸上運搬」の方法と稱し千八百四十四年頃よりして引續き二十餘年の間實行せり埃及內地を經過することなれば旅客に取りては不便と同時に多少の趣味もあ

りれども荷物の運搬に至りては非常の面倒を感じ一流船積の荷物をカイロ」より蘇士迄輸送するに三千頭以上の駱駝を要せりと云ふ其後歷山港より蘇士に到る鐵道開け頗る其不便の度を減ぜしと雖も未だ中々以て貿易上の要路たるに適せざること猶ほ今日に於ける南北亞米利加の間を横ぎるテフエワンテフエック」鐵道の如くなりしなり「陸上運搬」は此の如き隨分困難なる通路なりしと雖も尙ほ喜望峰を回りて行くに比すれば遙に優る所ありしを以て當時印度、東洋との往復は概ね此方法に賴りしなり

英人は今にしてこそ運河會社株式の過半を占め居れ初めの間は此計劃は到底成功の見込なく、砂土のことなれば隨て開鑿せば隨て埋沒すべく大きなることにて地中海と紅海との間を通ずる小舟船を浮ぶに足るべき小渠を鑿ち得るに過ぎざるべしと考へしなり其外政署上の關係もあり前に述べたる如く當時の主相「バルマアストン」侯を首め同國政府は引續き反對の意向を表し運河成り大汽船の航通差支なきに至りし後も二箇年間は英國の郵便物は尙ほ此運河に賴るを許さず依然歷山港と蘇士との間は「陸上運搬」に賴らしめ本船が樂に運河を通航しゆく間に郵便物丈は幾多の面倒を忍びて陸路をゆき再び元の船に積入れらるゝと云ふが如き愚策を執り居れり其後、郵便運搬の受負人、彼阿會社が年額二萬磅の助成金を減じて始めて運河に賴りて郵便物を運ぶの許可を得たり英人の執拗なること笑ふに堪えたりと雖も今は英人七分以上迄此運河を利用す甚だしき變化にあらずや

之を舊記に徵すれば地中海と紅海とを連絡せんとする考は近時に起りたるにあらず或る古學者は前代に在りて既に今の運河の東の方に一運河あり彼の「クリヲパトヲ」は「アリチユム」敗北の後、其財寶を以て此水路に賴り迹を晦ませりとの說を爲す其眞僞は之を證するに由なしと雖も降りて紀元前六百十年の頃に至り埃及王第二十六世の「パラヲ、ニコ」が「ナイル」河と紅海との間に運河を開鑿せしは確かに疑ひなき所にして之に賴りて船舶は四日間にして紅海に出ることを得たりとの記錄傳れり然れども此運河は年を經るに從ひ砂の爲めに埋了せられ其後第七世紀の頃に至り「ヤリフ、ヲマア」の大將「アムル、イブン、エルアッシイ」再び之を開鑿せし由なれども其以來、間もなく再び埋了

せるものと見るに關する何等の記錄をも存せず千有餘年にして千七百九十八年奈破翁其計劃を爲さんと技師に命じて之を測量せしめしに如何に誤りけん此技師は測量の結果紅海の水面地中海より甚だ高きが故に到底此計劃を實行し得る望なしと報告せしを以て遂に廢案に歸せしと云ふ五十餘年の後に至り復た佛人「レセップ」氏の手に賴りて其開鑿を見るに至りしも亦偶然ならざるに似たり

我船運河を下り始む兩岸には堤防あり其長さ西の方は凡そ二哩東の方は凡そ一哩「メンザレエ」湖に續きたる沼澤の中をゆくを以て堤防外は一面に低き濕地なり「ポートセッド」より四十三哩にして「チムサア」湖に達す「イスメリヤ」市湖上に在り雜樹葱鬱たる間數十の白壁を點ず船停まること少時客の上下するものあり又九哩にして「ビッタア」湖を得る昔時は紅海此處迄進入し來り「アーシヌー」なる港こゝに在りしと云ふ夜の九時過ぎ蘇士に達す燈光點々綠樹の間に隱現す夜色頗る佳なり一體運河は砂漠の中を蛇行し其幅七十二呎に過ぎず中には兩岸砂山を爲して壑底の如き處もあれば日光沙に入りて暑威當るべからず偶ま吹き來る微風も猶ほ炎熖の如くにして一層暑さを增す心地す六哩毎に兩船の往き違ひに便する爲め待合せ所あり其處に番所を設け信號柱を建て三五の樹木屋を繞りて茂り居れり堤上には此番所の外眼に入るものは土人の駱駝を驅り行くと蕃兒の船を逐ふて走り頻りに錢を求むるものあるのみ滿目の風物總て索莫たらざるはなし

彼の「陸上運搬」法の實施せられ居りし時は蘇士は其要樞に當り頗る繁昌せしと雖も其廢止以來唯上る各船はこゝに假泊して運河の都合を計るに過ぎず下る各船は僅に少時間進行を止むるのみとなれば目今にては餘り重要の地にあらず人口も一萬四五千の間なりと聞く

船紅海に入りてより暑威益甚だしく甲板上の温度百二三度に昇る右舷に隱現する埃及の山は砂石削立して更に綠樹の色を見ず日光之を射りて紅紫閃々たり夜間は誰も彼も皆臥床を甲板上に持ち出して眠る朝は早くより水夫等の甲板を洗滌する爲めに止むなく追ひ起され跣足にて、そこ〳〵を歩して以て快とす斯る時に在りても晚食の時は何れも禮服着用に及ぶことなれば

其苦しきこと言はん方なし首より滴る汗にて「シャッ」の襟は忽ちにして絞る計りとなる食後は皆思ひ〳〵に納涼の工夫を爲す予は即ち浴衣一枚となり足には麻裏草履を穿ちて舷に倚りて嘯く同船の人々君こそ船中最も涼き人なれと皆大に羨ましがれり併し白晝は人目もあれば矢張「フラヂル」の洋服にて我慢し通せり

馬耳塞より「ポートセッド」迄は船客の數少なかりしを以て予一人にて一室を占むることを得しも「ポートセッド」にて彼の「プリンヂッシ」より來りし多くの客乘り移りしを以て予も亦止むを得ず船室を換ゆることとなりて印度人と共に一室内に同乘せり室は右舷に在りて上等の部なれば別に申分もなく同居の印度人是亦カルカッタ近邊に在る或る侯國の宮内大臣と申すが如き身分の人にて色は黑けれども至て穩和相當の教育もあり政治上の思想も乏しからず却て予が爲には面白き話連れとなれり此外船中には印度の貴族幾組も乘船し居り何れも數名の從者を隨ふ中々に贅澤に見受けられぬ食堂に於て予が同卓せしは何れも此度本國に於て士官學校を卒業し任に印度に赴く少壯士官にして年齢二十二三位の所都合六人若き人のこと迎食事中にも色〻と戯れ「パン」を投げ合ふやら菓物を取り合ふなど頗る騷々しくマゴ〻〻せば何も蚊も皆先きに喰はれて仕舞ふ恐あれども話は一體に愉快にして毎時問題は兵制ならざるなし唯此の如き壯年仲間にても自ら一種の威儀を具ふ衣服等も決して亂暴ならず又互に話すうちにも常に敬愛の意を表し居る所、我邦の壯年社會とは異なる樣に覺ゑたり

紅海にて熱に苦むこと四日間十七日の黎明には船亞丁の港に着せり文晁の畫中に見るが如き突兀たる山前面に横りて宿雲猶ほ未だ散ぜず其下幾多の粉壁參差たり名にし負ふ紅海の烟喉にして英國の爲めには「ジブラルタア」に均しき要害の地たれば壘堡の堅め最も嚴重に見ゆ船の停ること二三時間に過ぎざる豫定なれば上陸するの暇なく唯空しく甲板に立ちて山色を眺むるのみ折柄砲聲の轟くあり是なん旭日旗を飜せる我軍艦吾妻號が日本に回航の途次昨來こゝを過ぎて砲臺に向て禮砲を放つなりけり船中の人々いづれも皆予に向て集り來りあれは貴國の軍艦なり名は何と云ふ何處にて造りた

る歟と問ふこと頻りなり中には寫眞を撮るものもあり予は何となく肩幅廣き心地して是等の船客に向ひ近時我海軍の擴張を說き聞かし頗る得意なり蓋し海外萬里の空に於て我國旗の飜るを見るほど愉快にして又心强きことは他に類ひ稀れなることなるべし

船の投錨を見るや集り來るは駝鳥の毛、山羊の角等を賣る沖商人と水中を潛りて客より擲つ錢を探る潛水兒どもなり商人は「アラブ」又は「バアシイ」にて其風采一見したる所琉球人に朝鮮服を着せたるに似たり潛水兒は申す迄もなく皆黑奴にて其四肢は肉痩せ骨のみより成れるが如し矯捷にして水をくぐりて游泳すること海獸も啻ならず夫れが面白さに人々思はず數片の銀貨を擲つに至るも可笑

亞丁を出でたる翌日は印度洋の入口を航し風浪頗る高く夜食は餘り心持宜しからず客の三分の二迄卓に就かざりしも其以來は風涼く浪穩かにして航頭無數の飛び魚の宛も蕊を出づる雀の如く波間を飛び遊ぶあるのみ二十二日の拂曉、馬耳塞出帆後十七日目にて孟買の港に着きぬ此航海里數合計四千二百九十餘哩

「ベニンシュラ」號は千八百八十八年の建造にして總噸數五千二百八十七噸、速力は平均十五海里位、此航中最も多く觸りし時は一晝夜に三百五十八哩に及べり船中の諸設備いづれも舊式の方にて別に目新しき所を見ざれども船僕の能く事に馴れて柔順なると、船內の規律正しくして防火、端艇諸調練の如きも常に怠りなく一意、船の安全に重きを置く所、感すべきことなり

孟買

寂びしきと言ふにもあらざれども日本人が日本語を話さざること十七日何となく不自由なる思あり左れば船の孟買に着て小艇に乘移り波止場に上り支店の楠本、高柳、石川の諸氏に逢ふて御機嫌能くといはれたるときは自ら空谷に跫音を聽くが如くに感ぜられぬ是れ强ち、われのみ心弱き爲めにあらざるべし夫より先づ支店にて小休、楠本氏に伴はれ其社宅に行きされば風呂を立置たり早速一浴、船中の垢を洗へかしと細君の好意に任せ浴衣を借りて浴

を執る、こゝは早や純然たる日本風にして下女が來りて肩流さんと促がすも、暫し此味を忘れ歐米の究屈なる世界を旅行し來りし身には少し耻かしき樣なり然れども浴し終りて浴衣一枚となりたる時の心地は實に得も言はれぬ程にて洵に何よりの御馳走なりき幸に社宅は狹からざるを以て予も別に旅宿を求めず直さま厄介になることゝせり

孟買島は海中に斗出し半島の如くなれども其實本土との間には一葦の水ありて之を劃し烟草の葉の如き形をなしたる長さ十一哩程の島なり而して孟買港は其尖端に在りて南に面し前に二三の島嶼あり水深くして數多の大船巨船を容るゝに足ると雖も今は「プリンセス」幷に「ヴキクトリヤ」の兩船渠あれば荷物の積卸は大抵此船渠に於てし石炭の如きものゝ外は港内に於て解取することゝ稀れなりと云ふ

此地は原と之を「マヒム」と稱し今の名の孟買に改まりしは近代の由なりその初めて歐洲人の手に歸せしは千三百三十二年葡萄牙人の占領に在り其後第十七世紀中に葡人と英人との間に約定成り英人も來りて貿易することを許され越て千六百六十一年、查斯第二世と「インフアンタ、カサリナ」と結婚の時、此島も亦花嫁の持參品の一として遂に英領に歸せり然れども此時は人口未だ一萬内外に過ぎず歲入も僅に六千磅の上に出でざりしかば英王も自ら支配するを不利と認め一箇年十磅の借地料にて之を東印度會社に貸與することとし千六百六十八年九月二十三日を以て引渡の公式を擧げたり是より同會社に於ては島の防禦向と貿易の奬勵に力を用ゐ大に發達を促せりと雖も引續き十九世紀の半頃迄は尙ほ葡人或は土侯との間に殆んど干戈の絕ゆる間なかりしと云ふ其後東印度會社の解散と共に印度政府の管轄する所となり百般の改良行はれ今は人口八十六萬餘に達せり但し此人口の内最も多きは「ヒンドゥ」にして其數五十五六萬、之に亞ぐを「マホメダン」とし其數十六萬内外、其次が「パアシイ」にして其數五萬餘、耶蘇教を奉ずるものは其數四萬五六千、其外は「ジユ」「ブラミン」佛教徒等なり

土人の住居する街衢は陋隘を極め一種の臭氣來りて人を襲ふ此に群居する雜色人種の狀態は極言すれば人類と思はれざる程なり之に反して白人種又

は「バアシイ」等の店舗を連ねたる街衢に至りては家屋壯麗にして比較的清潔なり就中停車場の如き、政廳の如き、海員寄宿所の如き、郵便局の如き何れも皆堂々たる大構造にして之を歐洲の大都會に移すも耻かしからぬ建築なり孟買人は此停車場を以て世界第一なりと誇り居るも盜辭にあらざるに似たり

上流社會の住屋は多く皆市外の涼しき海濱又は丘上に在り熱を避くるの必要よりして其建方高くして且つ廣く恰も我國の寺院を見るが如し

孟買は熱度常に高く「モンスーン」の期節即ち毎年六月より十月の初め迄を除く外は一切雨なく其代りに右「モンスーン」の間は我梅雨同樣、連日降り續け涼しけれども萬物皆濕い寇に心地宜しからずと云ふ予の着きし時には未だ「モンスーン」全く終らず名殘の雨時折〳〵に降り注ぎ草樹綠青々として寧ろ蒼涼人に佳なる思ありしも無雨の期節になれば草も樹も忽ち生色を失ひ鑠日赫々として燒くが如く中々に堪ゑ難き由なり支店の連中は成るべくはソンナ苦き時に來て見て貰ひ度ものなりと申居りぬ

我國紡績の原料に供する棉花は多く印度の產出に係るものにて近年其輸入高五十萬俵乃至六十萬俵を以て數ふるに至れり是れ明治二十六年來既に日本、孟買間に航路の開け居る所以にして現今にては我社支店の外に正金銀行、三井物產、內外棉花會社等の出店あり皆此棉花の爲めなり、孟買及び其近傍に於ては此綿花を原料として紡織の業に從事するもの甚だ多く製造所の數七十餘、錘數は四百萬に近く機數は十五萬に垂んとし日々使用する所の職工凡そ六萬五千人に及ぶと云ふ而して其製出する所の棉絲幷に棉織物類は多く其市場を支那地方に求むるものにて常に我紡績絲と上海あたりにて競爭し居るなり、然る所一昨年印度棉花の不作に加ゑて昨年支那事變の爲め棉絲の捌け場所を失ひ紡織業者は一體に非常の不景氣を蒙り當時製造所の休業するもの半以上に及び居るは氣の毒なることなり

「プリンセス」船渠と「ヴキクトリヤ」船渠とは中に道を隔てゝ相連る雙方共に附屬倉庫幷に水壓起重機等の設け完全に備はれり前者は千八百八十年の開渠にして其築造に六百八十萬留を費し大船十六艘を容るゝことを得べく後者は千八百八十八年の開渠にして幅員前者と大差なし、毎年棉花の輸出季節と

なれば左迄の大船渠も船舶常に輻湊し、積入を待つ棉花は山の如く堆積し驚くべき景況を呈すと云ふ

孟買に來りて第一面白く感じたるは種々なる人種の集合し居ることにて其容貌は固より服裝も各相同じからず就中殊に目立つは其頭の風にて半ば剃りて支那人に似たるもの、一反にも餘るならんと思ふ程の布を卷き付けたるもの、冠樣の頭巾を戴き居るもの其外或は眉間に黃點を施し居るもの、鼻片に銀鐶を挾み居るもの等、看れば看るほど奇々妙々ならざるはなし若し夫れ仔細に其風俗習慣等を吟味せば餘程趣味あることならん唯何れにしても多少の階級こそあれ土人は一體に劣等にして其路傍又は草上にゴロ〳〵仰臥して顧みざる所、先以て犬豕同然なり初め予は孟買に於て黑死病及び虎列刺病の流行盛なることを聞き來遊躊躇の念ありしも來て見れば土人の間に惡疫の流行すると云ふも左ながら牛馬の疫病を見るが如く其病毒が來りて我輩を襲ふとは思ひ至らず從て更に恐怖の念をも生せず又熱ら彼等生活の實狀を見れば寧ろ疫病の流行せざるが不思議と思われたり印度政府が如何に熱心に消毒豫防に努めたりとも刻底追付く所にあらざるべし然れども在留の友人等の言ふ所によれば惡疫の盛なる時には日々死するもの數百人、其死屍を火葬場に(市中に近き所に在り)送るもの引もきらず之が爲め火葬場は燒き切れざる程に世話敗滿々として立上る北邙の烟は晝夜斷ゆる迚なく寔に氣味わるき心地すと、左もありなん、次に奇なるは「バアシイ」の葬儀にして是は其宗旨の敎よりして死屍は之を拋ちて、バウチユア」と稱する猛鳥の啄み去るに任すなり「マラバア、ヒル」のほとりに鷲の如き嘴を有し鳶の倍もあらんかと思はるゝ黑鳥いくつとなく樹梢に群り居れり是れ即ち件の人食ひ鳥にして何となく猛悍の形象を具ふ葬場は此邊の深樹の裏に在り予は親しく見ざれども其構造は大なる圓筒形を爲し其內に死屍を投ずれば彼の猛鳥忽ち群り來りて瞬間に血肉を啄み盡し殘るは骨ばかりとなり空しく枯れ終る由なり奇なる風習もあるものにて其邊を過ぐるときは自ら腥風の肌に粟するを覺ゆ

二十四日雨降りたれども「ブーナ」へ遊ばんと楠本氏案內にて一僕を隨ゑ早天滊車に乘りて孟買を發す市中を離れゆくに從ひ追々と村落の景色面白く靑

秧萬頃處々に茅屋の存在する所、甚だ我國の田舍に似たり稻の如きも皆株植にして田の畦の拵ゑ方、サテは其間を縱横する溝渠の工合等彼我更に異なる所なし「カリヤレ」「ヂラル」等の停車場をも過ぎ孟買より六十二哩にして「カアジヤット」停車場あり是より有名なる「ボア、ガット」山中に入るを以て此にて機關車を增す、此山は印度半島の西海岸に沿ふて走る大山脈の一部分にして海面を拔くこと二千餘呎、孟買近邊より望めば恰も長き卓子を列ねたる如く其頂上は即ち一帶の高原にして譬へば猶ほ碓氷嶺を上りて信州に入るに似たり而して其山を上ぼる間の鐵道は非常なる難工事にして路は右に曲り左に轉じ壑を穿ち嶺を攀ぢ隧道を出でゝは隧道に入り棧道を過ぎては棧道にかゝり車窓の外を瞰下せば毛骨の慄然たる所も少なからず聞く所に依れば其隧道の總長さ二千五百三十五「ヤード」にして此鐵道の工事費總額は凡そ六百萬圓、即ち一哩に付凡そ四十一萬圓餘に當れりと云ふ此日は陰雨休み間なければ山は皆雲烟呑吐、小米畫圖の看をなし幾十條となく懸る飛瀑は半天に白龍の戲るかと疑はれ景色太だ奇なり中には數十丈廣く數百丈高きものもあり

極めて壯觀を呈す然れども此等の瀑泉も唯「モンスーン」季節間の雨多き時のみ現在するものにて無雨の時期となれば一絲をも止めざる由なり既にして「カンダラ」停車場に達す即ち「ガッッ」山頂の高地にして氣候孟買邊とは大に異なりて涼しければ孟買の富豪巨商の別墅頗る多し是より猶ほ幾多の停車場を經て午後二時半「プーナ」に達す孟買より百十九哩なり途中にて見る所の風物歐米は無論、我國等とも大に趣を異にし節より股の生じて木梢の形したる竹叢、水溜りの中より角と目だけを出して遊ぶ水牛の群、芭蕉の蒼々たる、柳樹の亭々たる、羅漢の畫に見るが如き草履はきたる巡査、達磨の如くに頭より赤布を被りたる婦女、見るものも見るものも皆奇異ならざるなし鐵道は廣軌にして氣車は室內も廣くして臥寢にも差支なく先づ整ふたる方なれども、大停車場は姑く措き小停車場は僅に小屋同然の陋屋に過ぎず、こゝに二三の驛員詰め居りて一見乞食の體をなす土人の乘客雨に暴され群がり居るさま極めて簡單粗雜なり大停車場には附屬の食堂もあり又各種の飲食物、菓物、新聞等を鬻ぐものあり別に不便なきが如し

「プーナ」は雨期の間孟買政廳の轉じ來る所にて原と「マラアサ」の都なり人口十六萬を有し此邊にては盛なる市街なりとす白人種の商買に從事するものも少なからず學校寺院等もあり又其孟買隊の本部なるを以て兵營もあり家屋は何れも樹木の間に在り道幅極めて廣く市街やら村落やら區別し難き程なりと雖も土人の市街に至りては汚穢にして狹く陋屋櫛比、壁破れ軒傾き、店頭鬻ぐ所は些細なる日用品に過ぎず家内を窺ふも更に什器らしき物を見ず、其荒凉狼藉の態、兵難に遭遇し剽掠を蒙りたる後を見るに似、人をして坐ろに惻怛の感を生ぜしむ然れども其家屋の建方に至りては頗る我國の家屋に類似し古矢宮、寺院等の如き何となく我が祠祀の趣あるを覺ゆ其源を尋ぬれば何か因緣のあることならん

馬車を賃して市中を巡覽し遂に有名なる「バアバッチ」山に登る市の南西端に在り眺望と古刹とを以て顯る左に英國の文士「サア、エドウキン、アーノルド」氏印度再遊記中此山に關する一節を抄譯して其概要を紹介せん

「バアバッチ」山は其頂に有名なる殿堂あり而して「ダイヤモンド、ガアデン」を瞰下す、石徑逶迤として堂に達し其勾配の緩やかなるは象の遊覽者又は禮拜者を乘せながら容易く登り得る程なり抑も「バア バッチ」と云ふは羅馬の所謂「マタア、モンタナ」に同じく「山の女神」にして即ち「シヴァ」の配偶なり印度に於ては或は兇惡なる形像を以て、或は優美なる形像を以て到る處に禮拜せらる(中畧)「バアバッチ」は又「情死」の主神なり此山に上る半途に一石ありて或る情死者の紀念となれり石上には例の如く「ヒンドウ」寡婦の亡き迹を傳ふる爲め其手腕幷に足痕を彫刻せり我等を案内せる波羅門教の一少年が此紀念を指して我等に誇示し而して近來此捨身の舊式の禁止せられたるを悔み且つ決して此神聖なる情死は「デッカン」に於ても普通一般に行はるゝにあらず其數漸く一箇年間に八九百人より多からざりしなりと話せしには我等も一驚を喫せり(氏は是より此の情死の事に付詳說する所あり之に依れば此情死と云ふは夫の死するや其妻が未來永々の緣を想ふて其跡を追ひ衣服端然整坐して夫の死屍を火葬する火焔に燒かれ死することを謂ふものにして其行列を送ることなほ祭禮の如く人々皆之を奇特なりとし

病人などは其手にて摩でらるれば平癒すると迷信する程なりとのことなり)此少年は住寺の僧の繼嗣にして往く〳〵は女神を主祭し山上に在る殿堂の番人となるものなり渠れは善く英語を操り「マコオレイ」の歴史を讀み居れり予が之に向ひて後日何か英書を贈與すべしと約したる時には豫て望みし堂内の貧者に對する喜捨を受けしよりも喜べり即ち渠れは恭しく且つ喜ばしく我等の爲めに開帳をなし特別の來遊者を遇すると同樣に女神の最大なる龕中に燈を點じ我等に觀めすに銀にて作りたる「マヘデヲ」の神が片膝に純金板にて作りたる其配偶の「バアバッチ」を載せ片膝に「ガンバチ」を載せ金銀の兩蛇が頭上に寶冠をかざし居る所を以てせり予は曾て「ガヤツリ」と稱する御經(波羅門教徒の外他人の之を誦するを以て最も神に對する非禮となすもの)を知れるを以て笑ひながら少年に向ひて之を唱ふんかと言へば渠れは無雜作に「ナコ」即ち、させ玉ふなと答へぬ堂外には幾多の禮拜者あり何れも花菓寶神木の葉など少し許りの祭物を神の祠前に捧げ居たり(中略)「バアバッチ」堂に於て最も見るべきものは馬蹄狀の鐵窓是なり是れは「バヂ、ラヲ」がこゝに建たりし宮殿の一部にして右の宮殿は電火の爲めに燒失せられたりと云ふ、かの最後の「ペイシュワス」(土侯)が「カアキイ」の戰を望みしも此窓よりなり「デッカン」山、原野、林樹の野色は此所よりの眺望に上越す所なし左れども此の如き眺望も其一萬八千の騎兵が僅に二千の印度兵と八百の英兵とを率ゐたる「バアバア」大佐の爲めに打破られつゝあることを眼下に瞰たる最後の日には「バヂ、ラヲ」の心には徒らに悲の種なりしならん又山上の女神も此日は如何に立腹して居たりけん、「ペイシュワ」がこの波羅門に對して寄進の品も少なからざりしに拘らず流石に猛き「デッカン」騎兵を、やみ〳〵と我殿堂の下に於て敵の踏み潰すに任せ遂に此良土を擧げて外人の手に移すに至りぬ

「アーノルド」氏の巧妙なる筆は予の拙筆の能く譯し得べき所にあらざれども其記事の大意は右の通りにて略ぼ「バアバッチ」山の勝概を知るに足る、われ等の登りたるときも堂外の小屋に一小僧ありて袒裼にて經を讀み居れり之に銀貨一片を與ふれば喜んで何か云々す蓋し謝意を表するならん眺望は「アー

ノルド」氏の記する如く極めて廣濶にして眼を樂ましむるに足るも殿堂は頗る粗造且つ狹隘なる六角形のものにして別に驚く程のこともなし唯其邊に祭り居る石像などの荒神然たる奇異なる形像を備ふるが可笑きのみ

われ等の投宿せしは「子ビヤ」と稱する旅館にして構内廣く家屋處々に散在し食堂の如き左迄不潔にあらざれど」も室内に入て見れば其粗末にして萬事不十分なること實に言語の外にて破れたる蚊帳、硬き「ベッド」等殆んど耐ゑられぬ思ひあり漸くのことにて一夕を過ごし翌朝早起、五時發の瀛車に乘り殘夢を車窓に貪り十一時頃孟買に歸り來れり二日に足らざる旅行なれども印度内地の模樣の一斑を見ることを得、且つ恣に山嵐蒼凉の氣を嗽ふをを得、甚だしき快味を覺ぬ去るにても此序に「アグラ」「テルヒ」迄も進みて世界の奇觀と稱せらるゝ大宮殿の古趾等を歴覩するの遑なかりしこそ重ね〳〵も遺憾なれ

此晩楠本氏主人となりて在留の日本人を社宅に近き倶樂部に案内す野間領事、間島三井物產支店長を首め十二三人來會兼て知り合ひの「タタ」氏の長男及び女婿等も亦來る此倶樂部は平生パアシイ」人の多く來集する所にて同人種の喜びて弄ぶ將棊の如き戲具等も備ゐあり其兩々相對して棊子を丁々と鳴らして戰ふ所、いかにも面白そふに見ゆ

孟買には從來我會社の船舶、必す毎月一回は來航するが故に在留の人々は米味噌等平生の用品、皆本國より取り寄せ半日本半西洋の食事を爲す向、多し然るに昨年七八月頃より支那事件の爲め孟買航船は御用船となり其航通中絶せしを以て誰の家も、誰の家も、皆不足品を生じ今しも久しぶりにて來航しつゝある廣島丸を日々頸を延て待ち居れり、ある日も正金銀行の高道氏の宅よりして何分印度米は、まづき故日本米二三升貸し玉へと申し來りたるを以て己むなく之に應じたりと楠本氏の細君、話して笑ひ居られぬ食事向既に右の如く半ば日本風なり無論婦人連中の衣服の如きは全く日本風其儘にて白地の浴衣に襦子の帶といふ身輕き體裁なり此點は龍動あたりに在留する婦人たちに比すれば頗る氣安きことなるべし要するに同じ亞細亞に屬するだけ何事も早や東洋じみたる方なり

長逗留する程の用向もなく殊には急がるゝ身にしあれば二十六日の便船にて出發することゝし朝の八時社宅を立出「ヴヰクトリヤ」船渠に來りて上海行の「チュザン」號(彼阿會社船)に上る此船には別段孟買より乘客なく唯支那行の看護卒百五六十名あるのみ之を率ゆるは少佐相當の軍醫にて其下に大尉相當の軍醫一名あり此二人だけ上等室に入り其外五六の下士連中は中等室に在り看護卒は何れも皆印度人にて布もて頭を卷きたる者共なり見送の爲め集り來る妻子眷族、數百人降りしきる雨を事ともせず黑き鬼の如き顏に豆の如き涙を注ぎ巡査に叱せらるゝをも厭わずワイ〳〵と泣きながら別れを惜む體見ぬ石壕村の昔をも忍ばれて轉た哀れを催したれども又よく〳〵見れば黑婦人の泣顏の何とも言へぬ醜狀を帶びたるには思はず噴き出さんとせり其中嚴重なる檢疫も終り船は十時過ぎに解纜す

古倫母、彼南、新嘉坡

船印度半島に沿ふて南下す洋上波靜にして海鏡の如く厖々たる微風輕凉を吹き暑威甚だ猛からず孟買解纜後三晝夜餘にして九月二十九日の午後一時頃「コロムボ」港に入りぬ港內には我吾妻艦及び我社の孟買航船廣島丸の碇泊し居るを認む先づ上陸して代理店「カアソン」商會に到り更に馬車を賃して其支配人「セクスフヒヤ」氏を二哩許り隔りたる海濱の私邸に訪ひ少時要談の後公園よりして土人の市中を驅りて港內に歸り廣島丸を訪ひ吉澤船長首め乘船中の人々と共に船中にて晩餐を執る我國旗の翻る所は即ち我國も同樣にて天涯の久客には何となく愉快なる心地せり

昔時に在りては「ガレー」港、錫蘭島に於ける重要なる貿易港なりしも今は其繁昌「コロムボ」に移り此地こそ島內第一の重要港即ち歐洲、濠洲、東洋間を航行する諸船舶の寄港場となれり原と印度洋に面したる一灣に過ぎざりしも千八百八十四年築港工事竣成し現今にては長さ一哩半に及ぶ突堤を以て寄せ來る波浪を防ぎ港內五百「エークル」の廣さを有する良港なり而して其一半は二十五呎以上の深さあり大船巨舶の碇泊に差支なし築港費額を合計すれば八百萬圓の上に出たりと云ふ然るに近來出入の船舶益多きを加ふ港內常に狹

隘を感するを以て更に其擴張に取掛り居れり

「コロムボ」の人口は現今十三萬に達すと雖も多くは「シンハレス」「タミル」回教人等にして歐洲人の居住するもの僅少なり彼の有名なる錫蘭茶の輸出は四時共頗る盛にして其外椰子樹より生ずる「コプラ」「ファイバア」等の輸出少なからず面積二萬五千平方哩、人口三百餘萬の一小島の割合には歐洲又は濠洲に向ふ物品甚だ多く我社の歐洲航船も毎二週一回、定期に寄港し毎船二千噸即ち全船腹の約三分の一は此港にて積荷し行くを例とす地の熱帶に屬するを以て殖物類の生育最も速にして茶の如きも一箇月間に二三回も收穫するを得るが故に斯くの如く面積の狹きに拘らず產する所多きに居るなり

我國の人力車は此地迄侵入し船の上り場には幾臺も客待すること神戸、横濱あたりに異ならず曳く者は固より土人なり其外馬車もあり健かなる白牛の曳く車もあり之に椰子葉にて編みたる蓬の如き覆ひを懸け土人の乘り往く所亦是れ畫裏の趣あり島人の三分の二以上を占むる「シンハレス」人種は男子にても頭髮を長くのばし鼈甲にて作りたる丸櫛を前頭にさし、上には「シャツを着、下には腰卷を爲す色は左程に黑からず容貌も一體に温和の相を帶び中には眉目の清秀なるものもあり小兒の如き寧ろ可憐なる方なり平生市中にては寶石細工等を業とす、其宗教は多く佛教なりと聞く

我乘船の中山號は此にて歐洲より來着する濠洲航船を待ち合せ其東洋行の郵便、旅客を積移す筈の所、該船未だ入港せざるを以て是夜は碇泊、翌三十日の朝は吾妻艦も廣島丸も共に東西に向て開帆、わが待つ濠洲航船「ヲーセアナ」號入れ違ひに到着、乃ち中山號の出帆は午後四時と定りたれば予は再び上陸、馬車を雇ひ豫て聞き及びたる「ケラン」の佛寺を訪ふ「コロムボ」より砥の如き坦道六哩、途上の風物サテは土人生活の狀態等、珍らしくもあり亦面白くもあり概言すれば家屋什器等、孟買近邊の土人に比すれば餘程進歩し居り大に我國の田舍街道に似たる所あり椰子林の間に折々小池あり紅白の蓮花咲き滿ちたるかと思へば忽ち水牛の其中に遊ぶを見るも一奇趣なり寺に近くなれば早や黃色の法衣を着たる僧の來往するあり花を携えて佛に歸依する老若もポツ々々見受けられ聊かながら清淨地らしき想を生ず寺の建方は壯麗と謂ふ

程にはあらねども境内廣く説教場の如き廣屋もあり堂内には大なる釋尊の臥像を安置し線香、水又は花等を其前に供したる樣我國に異なる所なし其別院とも稱すべき所には老僧居りて予を導て又そこにある佛を拜せしむ一銀貨を取りて之に與ふれば僧は帳簿を出して記名を乞ふ披き見れば知人の記名も少なからず「コロムボ」よりは丁度好き散歩場なれば船の碇泊中などに來遊せしものなるべし歸途は船の出帆に後れじと殊に車を急がす時々土人の後を追かけ來るあり取者之を見る毎に予を戒めて傘を注意せよと云ふ油斷せば彼等の奪ひ去る所と爲るを以てなり一體此邊の土人は至て狡猾にして欺瞞詐取の術に富み中々心の許せぬ方なりと聞く予が此行の如きも途中より頼みもせぬに吾れ案内せんとて一土人乘り來り二「ルーピー」の案内料を貪られぬ其代り途にて椰子の實の味は如何と話せしに此案内者忽ち土人の家より一つ貰ひ來り自ら「ナイフ」を以て穴を穿ち之より其内の水を呑むべし宛も「ラム子」に異ならずとて予に與れたり之を試むるに成程好風味なれども生ま温るき樣に覺ゆるは心地よからず船に歸り來れば宛も出帆時刻前なり

「コロムボ」より七十二哩にして「カンディ」と稱する地あり錫蘭島の舊都にして有名なる大佛寺の存在する所なり汽車の便あるを以て二十時間もあれば遊覽することを得べし中山號始めより三十日の午後四時出帆と定まり居れば往くべかりしものを到底其暇なしと思ひ斷念せしは殘念なりき後にて案内記を讀み益此思ひを強くせり

彼の「ヲーセアナ」號にて來りし東洋行の客二三十人「コロムボ」にて中山號に乘り移りしを以て船中俄に賑かになりたれども幸に我船室には同乘者來らず依然獨占の自由を享有せり出帆後日々多少の風波あれども追手の方にて凉しく船の行くことも頗る快なり四日には「スマタラ」の沖を過ぎ五日の拂曉に彼南港に着、暫く投錨す

前山葱翠、雲烟縈廻、一簇の人家其下に在り船は海岸近く迄進入す原來彼南は舊名「プリンス、ヲフ、ウエルス」島と稱し「マレー」半島の一屬島にして「ジョオヂ、タウン」其首府なれども通常今日にては入皆此「ジョオヂ、タウン」を以て直に「ペナン」と稱す島の長さ十五哩、幅最も廣き所にして九哩「マレー」半島の「プロビンス、

ウエルスリーを二哩乃至十哩の海峽を隔てゝ相對す船の碇泊するは即ち此峽上にして其形大江の如し

初め千七百八十六年「ケピテン、ライト」が東印度會社の爲めに曾長「ケダア」より年々一萬弗の借料にて此島を借入れ千八百五年には印度の一州とせしも同二十六年には「マラッカ」及び新嘉坡と相合して更に之を海峽殖民地と稱し其政廳を「ペナン」に設けたり然れども其後新嘉坡の逐日發達するに反して「ペナン」は寧ろ衰頽に赴くを以て政廳も亦同三十七年には遂に新嘉坡に移ることゝなれり是れ「ペナン」の小歴史なり現今人口八萬五千「スマタラ」に於る蘭領との貿易盛にして歐洲向の輸出品も尠なからず我社の歐洲航船も毎時寄港す「獨木舟の如き形したる小艇にて上陸直に馬車を驅りて市中を一巡す居民は八九分通迄支那人にして中には立派なる邸宅を構ゑ居るものもあり純然たる支那の殖民地と稱するも不可なき程なり日本人も例の醜業婦等大分居る模樣にて途中にて日本醫師の看板を見受けたり此地にて予の最も驚きしは大小の帆船多きことにて港端の峽上殆んど一哩許りの間は舳艫相銜みて充滿せり何れも皆此邊の諸島嶼より物產を集め來る爲めに用ゐらるゝものと思はる而して其船頭幷に荷物の取扱等に從事するものは大抵支那人にして中には「マレー」人種もありと雖も小部分に過ぎず代理店「ボーステッド」商會を訪ふたれども時猶ほ早きを以て誰れも出勤し居らず刺を殘して去る

市中より六哩許りの山中に一瀑布あり「ペナン」に上陸する人之を訪はざるものなき由なり甲板より望むに一條の白練遙に翠壁の間に懸る是れのみにても既に涼氣の來りて人を襲ふを覺ゆ時間なき爲め往て見るを得ざりしは太だ殘念なり

午前九時「ペナン」出帆翌六日の晩新嘉坡に着彼阿會社の棧橋に繫ぐ市中迄二哩餘新嘉坡は長さ二十六哩幅十四哩の島上に在る要港にして人口凡そ十萬現今海峽殖民地政廳の所在地なり「タンジョン、ペガア」會社に屬する船渠幷に倉庫は西部に在り凡そ一哩の長さに渉り其石炭庫には五萬噸の石炭を蓄ふるに足る其外「ニュー、ハアバア、ドック」會社なるものあり市中より三哩程の西に於て乾船渠幷に鐵工場等を有せり

此地は赤道迄僅に八十哩に過ぎざる所に在るを以て樹木鬱葱として翠色滴るが如く、起伏する丘陵、點在する島嶼、滿目蒼翠、若し夫れ驟雨一過、炎雲を驅逐して微風の涼を送る時に至りては熱帶とは云ひながら却て天候の人に快き思あり此近邊に於ては最も健康地なりと稱するも過言にあらざるを知る

乘客切符の件に付彼阿會社の支店に用向あり晩に馬車を驅りて之を訪ひ序に我社の代理店「バタソン、サイモンス」商會に立寄り明日來訪すべきことを申置き船に歸れば荷物の陸揚中にて「ウキンチ」の音、終夜鳴りも止まず喧ましくして眠り難きには大に苦めり翌早朝、昨晩約し置きたる案內者(「マレー」人なり)馬車を連れて來る即ち之に乘りて先づ有名なる「タングリン」の植物園を見る道程七八哩もあるべし園內には熱帶地方の草樹にして珍奇なるもの甚だ多く外に面白き禽獸もあり以て半日の閑を消するに足ると雖も急がるゝ身は匆々にして去り夫より水道の貯水場「マレー」人の寺院等を巡覽し十時頃約の如く代理店に來り主任者と要談少時「タンジョン、ペガア」の棧橋に來りしに折柄吾妻艦繫留して石炭の積入中なりしかば、之を訪て艦長永島大佐に面會、前路の平安を祝し我船に歸り來れば既に十一時半にして出帆迄一時間を餘すのみ

新嘉坡の市中も人口の三分二迄は支那人にして中々盛に商業を營み居る樣子なり日本人としては醜業婦の外は僅に三井物產が石炭商として人に知られ居る外、更に聞く所なし

近來新嘉坡より起りて「カルカッタ」に達する見込にて鐵道の開通を企て居り既に島內十四哩だけは落成したりとか云ふ、「カルカッタ」迄は距離凡そ二千哩此鐵道にして貫通せば「マレー」半島の開發大に見るべきものあらんとの評なり

北に向て航すること四晝夜半、十二日の拂曉、船、香港に入る一體此季節は最早南西定時風の起り來る時なるを以て船長は定めて新嘉坡、香港間に於て之に出會すべく初めの間は風力頗る强ければ少しは苦むべしと話し居りしに付予は寧に恐怖心を懷き居たりしも幸に風の起る季節後れたりと見る航海中毎日靜穩にして唯香港着の前夜より少しく船體の動搖を始めたるのみりな

しは何よりのことなりき

香港、上海

香港は廣東の南東七十六哩の所に在り長さ九哩、幅二哩乃至六哩、面積凡そ三十九平方哩に過ぎざる一小島なれども今は人も知る如く東洋貿易の要樞なり英領となりしは千八百四十一年のことにして其後千八百六十年に至り前岸なる九龍半島の一部分を幷せ九十八年に至り更に其區域を擴張して三百餘平方哩の地を支那政府より借用することになれり現今人口二十七萬七千餘、内二十六萬八千迄は支那人なり千九百年間の出入船舶は八萬二千四百餘艘、百八十五萬噸に達し出入貿易の高は自由港のことなれば確知し難きも先づ五千萬磅内外なりと云ふ

九龍を門司とすれば香港は猶ほ下の關の如く兩地相對して其間峽水、袋の狀をなし幾百の大船巨船を泊せしむるに足る寔に天の爲せる良港なり唯香港の方は全島殆んど皆山にして僅に九龍に面する一帶の海岸、少しく平かなるに過ぎず此に市街を作り支那商及び外商の家屋櫛比す上流の住屋は大抵皆山腰に沿ふて建られ粉壁層々、俯して海に臨む棧橋、倉庫、船渠等は皆九龍の方に在り其設備頗る行屆けり

我中山號は十月十二日の朝、此地に入港、予は同乘の人々に別を告げて上陸、香港「ホテル」に留ること六日、十八日の晩日耳曼郵船「バエン」號に便乘して上海に向ふ其間度々我會社の支店長三原氏首め上野領事等にも招かれ日本食の御馳走に預り日中は又支店員の案内にて或は處々を巡覽し或は在港中の我會社船を訪問して愉快に打過たり一夕三原氏が折柄歐洲より到著せる朝日艦の乘員を杏花樓と云ふ支那料理店に招き饗應する席に陪す、艦長三須大佐以下十八九名卓を圍みて快談沸くが如し支那料理の濃厚にして滋味多き、燕巢鱶鰭、箸を下すに足るもの少なからざるに反して其藝者の宛も小僧の御經を讀むが如く珍粉漢の歌謠を變化なき節にて奏する所、又は音樂隊とでも言ふべきか乞食同然の醜陋なる男數人が椽に列りて銅羅を鳴し胡弓を皷する所は所謂驢鳴犬吠にて喧騷なること何とも評の下し樣なし尤も藝者は何れも

例の窄袖に裾の廣き胯引を穿ち中には多少姿色の有るもありたれども何となく野卑にして見るに足らず其の外給仕の男が諸肌ぬぎにて毛胸に汗をたらし居る有樣など極めて殺風景にして其萬事に平仄の合ぬこと可笑くもあり又悶然にもあり東洋の風習に慣れたる眼にも尙且つ心中いやな心地せり」

香港にて最も見るべきは其飲用水の工夫なり、多からざる谷々より少し許りの溪水を引き來りて貯水池に滴らしむる爲めに山の中腹に水道を作り其上を「セメント」にて固め幷せて散策の道とせり長さ二哩もありぬべければ之を作るには巨萬の費を要したることならん又今一つ香港に奇趣を添ゑたるは山を上下する「ケーブル、カア」にして其坂路急なれば上る車は天に朝するが如く、下る車は忽ち轉下して碎け去らんとする勢あり甚だ危險に見ゆ然れども實際之を乘り試みるに案外平穩、上下とも寧ろ快き方なり殊に上り詰めて山頂に達すれば萬檣眼下に連り左ながら池の面に秋の木葉の飛び浮ぶに似、眺望絕佳、風亦獵々として淸凉を吹く

香港には人力車多けれども坂路は之を用ゆる能はず別に椅子に長き棒の付きたる如き籃輿あり一般に使用せらる特別自用の分は四人の支那人足をして輓かしむれども通常辻にて客待のものは輓夫二人なり其ユサ々々として緩行する所、頗る乘り心よく何となく中にて詩集でも開き見たくなることあり

「バエン」號が香港港外に出でし時には風浪頗る惡しく左しも七千噸大の巨船も動搖して止まず食卓上の瓶子類皆顚覆す然れども予は最早數千哩の海路を經、船に熟したれば別に船暈の氣味なし是より三日間每日風急にして波高かりしかども敢て苦む所なく食事も缺きたることなかりき

二十一日の晩、吳淞に着す江風冷かにして始めて天の秋なるを覺ゆ十四五日前に赤道近邊を經過せし身には何となく淸冷の氣は珍らしく、酷吏の手を脫して故人の許に來りたるが如し二十二日の朝小蒸滊に乘り移りて江を溯り十一時半、上海に着す

豫て日耳曼郵船は近來、船客の待遇向に大勉强なる由聞及びたるが「バエン」號も中々注意屆き居れり一例を言へば吳淞に着する前夜の如き夜食の献立書

例の窄袖に裾の廣き胯引を穿ち中には多少姿色の有るもありたれども何となく野卑にして見るに足らず其の外給仕の男が諸肌ぬぎにて毛胸に汗をたらし居る有樣など極めて殺風景にして其萬事に平仄の合ぬこと可笑くもあり又悶然にもあり東洋の風習に慣れたる眼にも尙且つ心中いやな心地せり。

香港にて最も見るべきは其飲用水の工夫なり、多からざる谷々より少し許りの溪水を引き來りて貯水池に滴らしむる爲めに山の中腹に水道を作り其上を「セメント」にて固め幷せて散策の道とせり長さ二哩もありぬべければ之を作るには巨萬の費を要したることならん又今一つ香港に奇趣を添ふたるは山を上下する「ケーブル、カア」にして其坂路急なれば上る車は天に朝するが如く、下る車は忽ち轉下して碎け去らんとする勢あり甚だ危險に見ゆ然れども實際之を乘り試みるに案外平穩、上下とも寧ろ快き方なり殊に上り詰めて山頂に達すれば萬檣眼下に連り左ながら池の面に秋の木葉の飛び浮ぶに似、眺望絶佳、風亦獵々として清涼を吹く

香港には人力車多けれども坂路は之を用ゆる能はず別に椅子に長き棒の付きたる如き籃輿あり一般に使用せらる特別自用の分は四人の支那人足をして輦かしむれども通常辻にて客待のものは輦夫二人なり其ユサ々々として緩行する所、陷る乘り心よく何となく中にて詩集でも開き見たくなることあり

「バエン」號が香港港外に出でし時には風浪頗る惡しく左しも七千噸大の巨船も動搖して止まず食卓上の瓶子類皆顚覆す然れども予は最早數千哩の海路を經、船に熟したれば別に船暈の氣味なし是より三日間每日風急にして波高かりしかども敢て苦む所なく食事も缺きたることなかりき

二十一日の晩、吳淞に着す江風冷かにして始めて天の秋なるを覺ゆ十四五日前に赤道近邊を經過せし身には何となく淸冷の氣は珍らしく、酷吏の手を脫して故人の許に來りたるが如し二十二日の朝小蒸氣に乘り移りて江を溯り十一時半、上海に着す

豫て日耳曼郵船は近來、船客の待遇向に大勉强なる由聞及びたるが「バエン」號も中々注意屆き居れり一例を言へば吳淞に着する前夜の如き夜食の献立書

を見れば「アイスクリム、ヲン、フアヤ」の一品あり而して恰も其出る時になれば食堂の天井に耀きたる電燈忽ちにして消えたり機械に故障の出來たるならんと怪み居る中、外面に當りて樂聲囃吭として起る(船中に音樂隊あり一日に三四回奏樂)既にして數人の給仕手に〳〵「アイスクリム」を盛りたる皿を携ゑ其内に燭を點じ樂聲に連れて食卓を歩き廻ること數回にして之を人々の席に置く此に於て消ゑたる電燈再び煌々として晝の如し衆皆喝采して之を喫せり畢竟兒戯に類する趣向なれども無聊に苦む船中にては此の如きことも亦大に人の興味を催さしむに足る其外毎夕滑稽じみたる戯を演じ人をして思はず失笑せしむること多し彼阿船中の無愛嬌なるとは大違ひなり

上海は流石、支那四百餘州の心腹を貫流する楊子江兩岸の沃野を引受たる一大港たるに耻ぢず規模宏壯にして西洋造りの家屋、流に枕みて相連り、歐洲大陸の或る港を見るが如し蓋し孟買を除けば新嘉坡も香港も到底此地の盛にして且つ萬事西洋染みたるには及ばざるべし而して今後支那の開發と共に更に幾倍の繁昌を加ふるや知るべからざるものあり東洋に於て最も有望なる地たるは言ふ迄もなし

我會社の倉庫、棧橋等は古るく三菱會社時代より襲有するものにして蘇州江と黄浦江の會流する所の少し下に在りて設備向き敢て他に對して遜色あるを見ず若し今日に於て斯の如き樞要便利の區を求めんとせん乎、縱令ひ幾百萬を投ずるも到底手に入り難かるべし洵に我會社の至寶たり

支店長林氏及び高柳豊三郎氏等懇切に余を各所に案内せられ又一夕は小田切領事に招かれて日本食の馳走に預る是迄途中にて折々日本料理を味ふたれども何れも皆、口に適せざりしが、こゝに來りて始めて日本料理の日本の味あるを覺ゑぬ是れ調理方の如何にも因るべけれども一は氣候の我邦と大差なきと距離も左迄遠からざるとを以て味噌醤油等の能く原味を保ち居る故なるべき歟

上海城内即ち支那人の市街は道路狹隘にして極めて不潔、一種の臭氣を放つ中には相當の商賈もある由なれども之を英租界、佛租界等の居留地に比すれば全然別乾坤たるを免れず地理に熟したる案内者なければ八幡知らずに迷

ひ入りたる如く忽ち出る所を失ふに至るべし綢緞繻子等の類は此城内にて買ふ方餘程廉價なりとのことなり

張園、虞園と云ふは共に上海に於ける支那風の倶樂部然たる會遊所なり建築頗る立派にして芝居の如き興行ものもあり誰にても入りて茶果を執ることを得べし、こゝに來りて良家の士女輩が粧飾に心を凝し茶を飲みに來る所を見るも興あり給仕に出る支那僕が茶果代の吊錢を、此方より心付に遣はすと言はぬ先きに早くも自分より頂戴と出懸るも中々厚かまし、兩所の内、虞園の方、廣くして室の數も多く裝飾向も美なり但し雙方とも庭園としては更に見るべき趣なく太湖石に小筠位の假景が關の山なり

上海と呉淞との間に鐵道あり汽車三十分にして往くを得べし、誰も知る通り呉淞には江中砂洲あり大船は滿潮の時にあらざれば之を超ゆる能はざるが故に大抵こゝに碇泊す今後世界の船舶益大なるに從ひ上海迄溯り往くものの漸く其數を減じ上海の繁華は下りて呉淞に移るならんとの說あり隨分空談にもあらざるを以て近來呉淞に目を注ぐもの多く要樞の地は既に夫れ〳〵外人の手に落ち居れり我會社に於ても相當の場所一區を購入し以て他年に備ふる所あり予も序ながら往て之を實見せり

ある夜偶ま金小寶と喚ぶ妓の家に就き歌を聽く其家は先づ銀座の裏通と言ふべき横町に在り入口は隨分不潔なれども奥に入るに從ひ朱檀の長卓、椅子等の器具も卑しからず殊に其寢室には飾るに珠玉を以てす而して、其前に一卓あり、こゝに一通りの料理を備えて客を饗す席に待りて歌ふもの皆に主人の金小寶のみならず客の指名に依りて他より幾人にても來るなり然れども主人を首め何れの妓も大抵二三十分時間にして去り復た次の座敷に招れ往くを例とす其纏頭一席大抵三圓、香港にて見たるものに比すれば容色、服裝共に優等にして頭髮并に衣服には金銀珠玉を惜氣もなく飾り立て其携え居る石鹼箱の如き小き化粧箱は多く純金又は純銀を以て之を作る、其邊は隨分贅澤に見ゆ蓋し一身に纏ふ所を算し來れば少くとも數千金に上るべし而して外に出る時には香港にあると同じ風なる籃輿又は馬車を用ひ雛妓の如きは近き所は人肩に倚り居れり、聞く所に依れば此地の風習は人に招かれたる時

は客自ら其知る所の妓一人乃至二三人を招かざるべからず、招けば其纏頭も亦客の自辨なれば少しく交際社會に出るに於ては毎夕非常の散財を要する由なり

馬車を驅りて郊外に出れば大陸の氣象自ら雄大にして滿目青山の影だにも見えず秋樹烟淡く平野茫々たる間、土饅頭の處々に散在するものあるのみ是れ即ち支那人の墓所にして其埋葬に關し六つかしき方角論あるを以て斯の如く何處となく散在するとのことなり

上海を集點として江河を通航する支那形船の多きことは驚くべき程にて黄浦江上凡そ一哩程の間は此等の舟にて水を埋め去らんとする勢あり又以て物貨の上海に集散するもの多きを證するに足るべし

予は上海に滯留すること五日、二十六日の夜、佛租界より小蒸汽船にて江を下り吳淞に於て佛國郵船「トンキン」號に上り日本に向け出發、海上風靜にして二十八日の朝、長崎に入港、船中には佛國より歸朝の途に在る巨智部博士、伊藤海軍大佐と外に一二人の邦人乘居たり

今や予は坤輿を一週して復た無事に故國の土を踏み幾多の故人と相會するの身となれり山色水光も自ら、われを歡迎するが如く心中限りなきの喜びあり唯長崎に上陸して見れば言ふ迄もなく來る人も往く人も皆我同胞なれば國らずも心中、何とて斯く、こゝには日本人の多きやと思ふ感を生じ來らんとせしも顧へば自ら可笑さに堪えざる所なりき

夫より予は直に九州鐵道に賴り武雄の温泉にて旅塵を清むること一夕、門司、宇品を經て神戸に出、數日間滯留、十一月七日を以て芽出度、東京に歸着せり

近藤社長と川田氏とは其後周ねく大陸各國を巡遊せられ孟買を經て本年四月十六日神戸に歸着せられたり

漫遊雜錄　終

附錄

將遊米歐船發橫濱

今日開程豈偶然。此遊勞夢十餘年。落花片々飛如雪。送我長風萬里船。

太平洋上作

春風駛過太平洋。遮莫航程日遠鄉。詩膽養來如斗大。天空海濶碧茫々。

晚立舵樓對夕暉。雄風吹浪濕征衣。來從何處去何處。唯見船頭海鳥飛。

布哇

十日滄溟路幾千。灣頭今夜泊樓船。猶疑星斗垂蘸水。點々紅燈前岸連。

島山百里屬誰家。缺月無心照白沙。感似秦淮泊船客。夜風吹送後庭華。

船中奏樂會

團欒情似弟兄情。半月同船萬里程。此夜天晴風浪穩。越琴胡筑到三更。

金門（ゴルドンゲート）

雲模糊裏認前村。顧望滄溟白浪飜。西去扶桑六千里。疾風猛雨入金門。

自桑港到老安街（ロスアンゲルス）濠車中

千里草肥青似氈。夕陽深處牧牛眠。始知一種西人畫。粉本全然自此邊。

不知何處有人家。半日荒原走火車。無水無山無樹木。唯看短草覆平沙。

老安街

大道坦然不着塵。朱樓白壁各爭新。欝葱何樹翠圍屋。日暮澆花多美人。

古魯那都（コロナド）

如城客舍對前山。髣髴身遊圖畫間。一陣微風戰棕櫚。蒼々月照幾灣々。

前臨滄海後青山。寒暖常同春夏間。只少垂楊萬枝翠。長堤空劃釣魚灣。

坡美東（ポルトン）山中

人家斷處牧牛遊。一路凄迷新樹幽。又見草花開滿野。蟲聲唧々冷如秋。

坡美東峰上司天臺以望遠鏡窺天象書感

旦覺斯身近帝庭。山河月界認全形。遊蹤却笑常無定。吾亦人間一客星。

月夜下坡美東峰

深山來訪司天臺。日暮雲濤脚底堆。自笑好奇心未止。輕車乘月下崔嵬。

聖能勢

綠樹重陰夏淺時。胡床半日賦新詩。無端憶起家鄉事。頭上忽疑聽子規。

櫻子

喫來忽覺齒牙香。上膳累々紫又黃。雙美由來天不與。花歸我土子斯鄉。

車窓望謝陀山

層巒幽嶺翠千重。屹立天邊白玉峰。憶起貌姑山上路。火車窓裡望芙蓉。

自桑港到波土蘭瀛車中

耕舍樵家送又迎。青山起伏水回縈。風光不似南方瘠。終日長松翠裏行。

波土蘭

老樹長松翠似屏。人家幾萬枕平汀。三山鼎立天邊白。一水橫流屋外青。

前判事婆克氏拉予輩泛舟和聖東湖夫人及其所知小姐二人同遊

樓臺隱現水之濱。綠樹青山不著塵。日落滄波明似鏡。輕舟一葉

載佳人。

晩香坡

斷崖千尺晩潮奔。萬斛樓船來泊門。十數年前始開境。近林未見斧斤痕。

自舍路(シアトル)到聖波爾(セントポール)瀛車中

鐵路羊腸往又還。不知身入畫圖間。走車轆々夢驚覺。睡眼摩來看碧山。

參天老樹千年物。戴雪層巒太古山。風景看來眞壯大。更無人屋點其間。

休說人間行路難。火輪如矢入層巒。可憐一片眉尖月。今夜落機山上看。

平野唯看鐵路通。炊烟遠斷草連空。車窓終日人皆倦。宛在滄波萬頃中。

訪和聖東故居

風自蒼凉鳥自吟。繞家長樹綠陰深。功成名遂棲遲好。千古江流識此心。

乃耶(ナイヤ)我羅(ガラ)大瀑

大江直下掛狂濤。萬億雷轟勢最豪。只怕須臾坤軸裂。補修復使女媧勞。

崖頭綠樹自生風。漠々烟雲白蔽空。奪我心神是何氣。如逢命世大英雄。

樹在中流蔽島青。烟封萬尺水晶屏。無心石燕不知倦。飛去飛來戲巨靈。

大瀑下流

奔湍打岸復縈回。忽見波瀾江上堆。文字何人妙如此。千年只憶大蘇才。

船發紐育

故國遙々路萬千。笑吾身迹日飄然。山河北米周遊盡。去上太西洋上船。

太西洋上對月

猶覺舵樓夜氣寒。長空如水水漫漫。辭家鄉後月三滿。兩度滄溟深處看。

宇院壯城

如今猶聽玉鑾傳。休問桑滄幾變遷。滿壁青苔石樓老。風風雨雨一千年。

帝武河

溶々碧水溯流行。凉自翠楊深處生。艷羨長安幾年少。輕舟無不載卿々。

蘇州途上

短亭長驛路悠々。細雨無聲綠樹稠。不似英京暑威暴。滿袗雲氣入蘇州

自笑遊蹤曾不定。今朝別友客身單。山迎水送走車疾。樓閣蘇京烟雨寒。

安士府

西舶東船日來往。酒家聯立水之涯。當壚也有好奇女。善唱扶桑新竹枝。

殘月檣頭光漸微。江風近曉冷吹衣。越吟吳調聲猶亂。知是舟人醉未歸。

瓦土樓（ウオトルロー）

自知一戰賭歐洲。白馬青袍叱貔貅。遺恨蕭々前夜雨。泥濘空敗乃公謀。

英軍佛陣果何邊。落日平原牧馬眠。殷血成河骨山積。回頭八十五年前。

和蘭途上

林端尖塔耶蘇寺。水畔茅茨百姓家。滿目江村多古色。牧牛遊處輾風車。

白耳塞（ヴェルサイユ）故宮

玉樓金殿奪天工。一代豪華勝祖龍。楚火後年焚不到。依然當日阿房宮。

園林無際綠周遭。奇巧極來樓閣高。不怪漁陽鼓鼙起。滿宮金碧悉民膏。

奈破翁廟

絕海幽囚夢後圖。風雲不利歲空徂。唯看一事酬公志。白骨歸來鎭舊都。

巴里書感

歷代王宮競巧奇。依然金碧憶當時。百年屈指幾興廢。人道長安似奕棊。

龍動雜詩

評紅品紫步縱橫。復立墟邊頻喚觥。攝政街頭花未睡。涅孫塔上月將傾。

李白桃紅滿路傍。嬋娟濃抹又輕妝。夜深狂蝶未眠去。南北東西飛逐香。

地中海上船中開奏樂會

一片秋帆地中海。涼風明月聽胡歌。人間此境眞難得。清福由來客裡多。

蘇士運河

鎭日樓船下運河。眼中更不見青螺。胡歌斷續聲何處。時有黑奴驅駱駝。

兩岸平沙漠々連。人家村落果何邊。黑奴遙認樓船過。赤裸追來乞酒錢。

勵節夫

當年煬帝業相同。千里開來水路通。長使民生賴其慶。勝他百戰奈翁功。

紅海

夜色蒼茫氣自秋。好携鐵笛上舵樓。涼風吹入西紅海。明月中天照二洲。

船中聽客話印度亡滅事迹

休以興亡問彼蒼。山河換主幾星霜。誰知印度洋深處。說到當年人斷腸。

孟買

山河回首行程速。鴻爪留痕三大陸。從是家卿路幾千。長風破浪入天竺。

孟買所見

椰樹高低列水隈。枕灣粉壁幾樓臺。人顏多是黑如墨。何事烏頭白似灰。

紅顏白骨恨偏長。薤露歌殘動北邙。鷲背鷹眸是何鳥。啄人冷肉

充飢腸。

自孟買到普南(プーナ)流車中

車前起伏一連山。烟雨濛々壓翠鬟。自覺風光似吾土。茅茨斷續稻田間。

幽谷深山雨又風。好奇人在走車中。懸泉幾百雲呑吐。髣髴白龍跳半空。

彼南(ペナン)

潑墨不乾山色新。幾千粉壁水之濱。舵樓遙望懸泉白。涼自半空來襲人。

吳淞

兩岸人家淡有無。大江月暗雁相呼。舵樓頓覺征衫冷。一片秋帆夜入吳。

申江聽妓

猶是家鄉天一涯。秋風滬上戰兼葭。慇懃勸酒故人在。銀燭紅樓聽琵琶。

歸朝

敢言鵬翼試雄飛。心事由來多易違。米水歐山三萬里。夢中跋涉夢中歸。

1961/85

明治三十四年十月廿八日印刷
明治三十四年十月卅一日發行

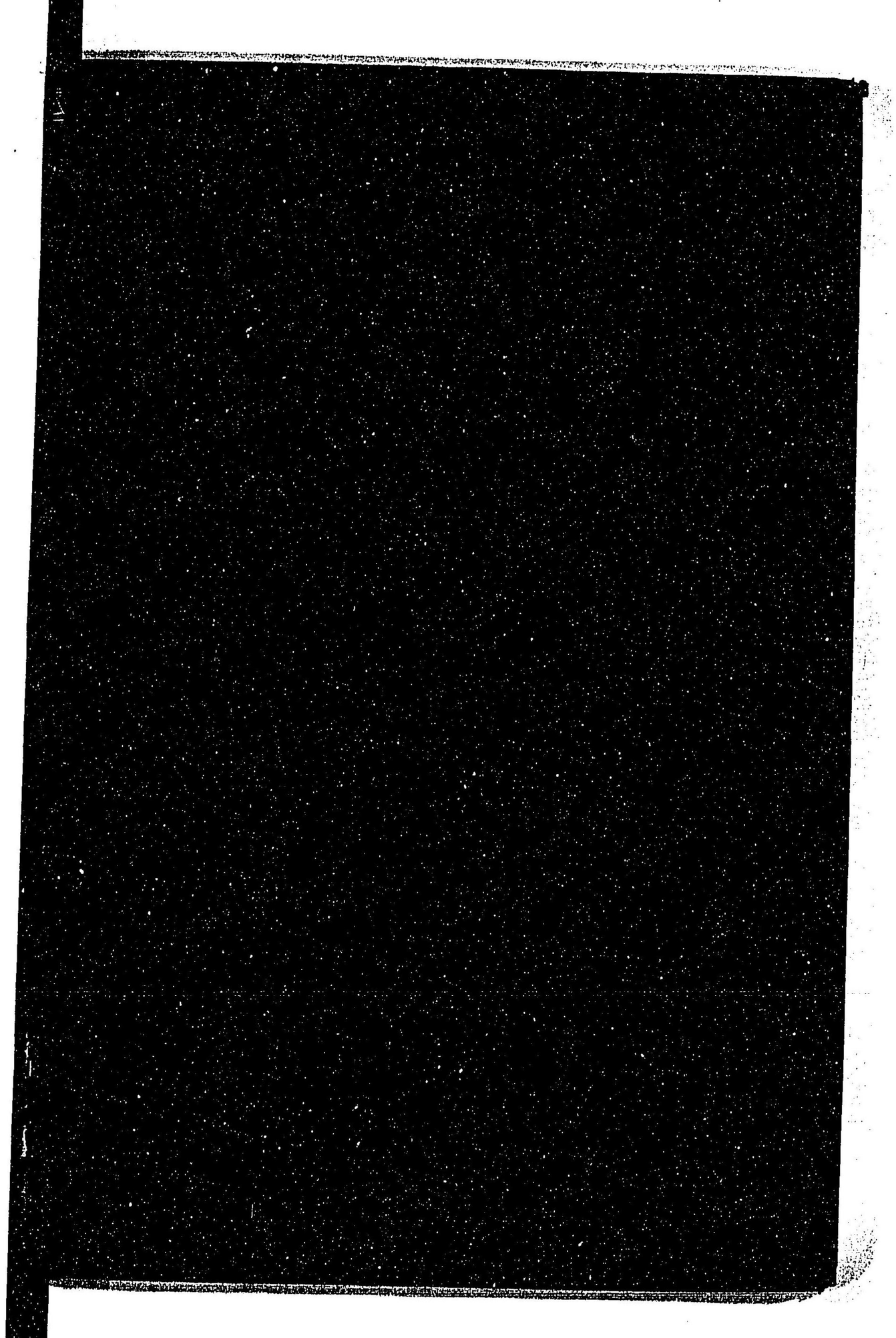
非賣品

編輯兼發行者　正木照藏
東京市麹町區有樂町三丁目一番地

印刷者　齋藤章達
東京市日本橋區兜町二番地

印刷所　東京印刷株式會社
東京市日本橋區兜町二番地

95
5



Ⓜ

022343-000-0

93-5

漫遊雑録

正木　照蔵／著

M34

ADA-0878